詳註

上古文粹

特257
404

始

特 257/464

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

詳註上古文粹

株式會社 帝國書院

昭和八 帝國圖書館藏

柿本人麿像　（藤原千春筆）

例　言

一　本書は中學校改定要目の精神に據つて、中學校に於ける增課教材たらしめ、併せて他の中等諸學校に於ける補助讀本たらしめる目的を以て編纂したものであります。

一　本書は古文・古文學教授の目的を生かし得べきやうに、各章の選擇・拔萃に特に意を用ひてあります。

一　本書は生徒の豫習に便益し、兼ねて教授者說明の勞を幾分輕減せんが爲に、下欄に詳註(教科用書としての)を施してあります。

昭和八年二月

編　者　識

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

詳註古事記粹

株式會社 帝國書院

詳註

古事記粹

目次

一　草薙の劍　一
二　因幡の白兎　三
三　國土平定　五
四　海幸山幸　一四
五　神武天皇の御東征　二一
六　倭建命　三〇

一　草薙の劍

建速須佐之男命出雲國の肥の河上なる鳥髮の地に降りましき。此の時しも箸其の河より流れ下りき。於是須佐之男命、其の河上に人有りけりと以爲して、尋覓ぎ上り往でましししかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置ゑて泣くなり。爾ち、「汝等は誰ぞ。」と問ひ賜へば、其の老夫、「僕は國つ神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂す。」と答言す。亦、「汝が哭く由は何ぞ。」と問ひたまへば、「我が女は本より八稚女在りき。是に高志の八俣遠呂智なる、年毎に來て喫ふなる。今其來ぬべき時なるが故に泣く。」と答白す。「其の形は如何さまか。」と問ひたまへば、「彼が目は赤加賀知如して、身一つに頭八つ尾八つ

古事記　三卷。元明天皇の和銅五年に太安萬侶の手によつて撰進した。日本最古の文獻で天地開闢の神話から推古天皇の御代に至るまでの事を記した最も貴重なる國典である。

建速須佐之男命　伊邪那岐命が禊祓をなされた時、左の目から天照大御神、右の目から月讀命、鼻から建速須佐之男命がお生れになつた。

肥の河　今の斐伊川をいふ。

鳥髮　船通山の古名。

國つ神　天つ神に對していふ。國土にゐた神。

高志　簸川郡古志村にあたる。越の國といふ説もある。

八俣遠呂智　書紀には八岐大蛇と記してある。八は多い意味である。

赤加賀知　赤いほほづきのこと。

有り。亦其の身に蘿及檜枏生ひ、其の長さ谿八谷峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常血爛れたり。」と答白す。

爾速須佐之男命其の老夫に、「是汝の女ならば、吾に奉らむや。」と詔りたまふに、「恐けれど御名を覺らず。」と答白せば、「吾は天照大御神の伊呂勢なり。故今天より降り坐しつ。」と答詔へたまひき。爾に足名椎、手名椎神、「然坐さば恐し、立奉らむ。」と白しき。爾速須佐之男命乃ち其の童女を湯津爪櫛に取り成して、御美豆良に刺さして、其の足名椎、手名椎神に告りたまはく、「汝等八鹽折の酒を釀み、且垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐を結ひ、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待ちてよ。」とのりたまひき。故告りたまへる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智信に言ひしが如來つ。乃ち船

伊呂勢　同母兄。伊呂は親愛の意の接頭語。

湯津爪櫛　櫛の齒の密になつたもの。

取り成し　變化させる。

御美豆良　上代男子の髮の結び方。頭の中央から髮を左右にわけて耳の所で結れたもの。

八鹽折の酒　幾度も繰り返して作つた強烈な酒。

廻し　「めぐらす」の古語。

佐受岐　棧敷のこと。假床。

酒船　酒槽。

毎に己が頭を垂入れて、其の酒を飲みき。於是飲み醉ひて留まり伏し寢たり。爾ち速須佐之男命其の御佩かせる十拳劍を拔きて、其の蛇を切り散りたまへば、肥の河血に變り流れき。故其の中の尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀の前以ちて刺し割きて見そなはしかば、都牟刈の大刀在り。故此の大刀を取らして、異しき物ぞと思ほして、天照大御神に白し上げたまひき。是は草那藝の大刀なり。

二　因幡の白兎

大國主神の兄弟八十神坐しき。然れども皆、國は大國主神に避りまつりき。其の八十神各稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に俤を負せて、從者として率て往きき。於是氣多

十拳劍　拳は一握の長さである。即ち指四本を並べたものである。故に刀身が十握もある劍。切り散り　寸斷にする。

都牟刈　刀の切味のよい形容。

草那藝の大刀　天叢雲劍ともいふ。

大國主神　須佐之男命の神裔。大穴牟遲神ともいふ。書紀には大巳貴神と記してゐる。

稻羽　因幡國。

俤　主として旅具を入れる。

氣多之前　因幡國氣多郡。

之前に到りける時に、裸なる菟伏せり。爾に八十神其の菟に謂ひけらく、「汝爲むは、此の海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾の上に伏せれ。」といふ。故其の菟八十神の教ふる從にして伏しき。爾に其の鹽の乾く隨に其の身の皮悉に風に吹き拆かえし故に、痛苦みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神其の菟を見て、「何由汝泣き伏せる。」と言ひたまふに、菟答言さく、「僕淤岐の島に在りて此の地に度らまく欲りつれども、度らむ因無かりし故に、海の和邇を欺きて言ひけらく、『吾と汝の族の多き少きを競べてむ。故汝は其の族の在りの隨率て來て、此の島より氣多の前まで皆列み伏し度れ。吾其の上を踏みて走りつつ讀み度らむ。於是吾が族と孰れ多きといふことを知らむ。』如此言ひしかば欺かえて列み伏せりし時に、吾其の上を踏みて讀み度り來て、今地に下りむとする時に、吾、『汝は我に欺かえつ。』と言ひ竟れば、即ち最端に伏せる和邇我を捕へて、悉に我が衣服を剝ぎき。此に因りて泣き患ひしかば、先だちて行でませる八十神の命以ちて、『海鹽を浴みて、風に當りて伏せれ。』と誨へたまひき。故教の如爲しかば、我が身悉に傷はえつ。」とまをす。於是大穴牟遲神其の菟に教へたまはく、「今急く此の水門に往きて、水を以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲の黃を取りて、敷き散らして其の上に輾轉びてば、汝が身本の膚の如、必ず差えなむものぞ。」とをしへたまひき。故教の如爲しかば、其の身本の如くになりき。此れ稻羽の素菟といふ者なり。今に菟神となも謂ふ。

三　國土平定

尾の上　嶺の頂のほとり。

吹き拆かえ　「え」は受身の助動詞。吹き拆かれの義。

淤岐の島　隱岐の國とも沖の島ともいふ。

和邇　鰐或はワニザメ（鱶の一種）ともいふ。

族　仲間。一族。

讀み　數へること。

命以ちて　仰せになつての意。

水門　川が海に流れ入る所。

蒲の黃　蒲の穗の黃色な花粉。

輾轉　ころげまはること。「こい」は「臥す」の古語。

菟神　菟を神格化したもの。

天照大御神の命以ちて、「豐葦原之千秋長五百秋之水穂國は我が御子正勝吾勝勝速日天忍穂耳命の知らさむ國。」と言因さし賜ひて、天降したまひき。　於是天忍穂耳命天の浮橋に立たして詔りたまはく、「豐葦原之千秋長五百秋之水穂國はいたくさやぎて有りなり。」と告りたまひて、更に還り上らして、天照大御神に請したまひき。　爾高御產巢日神・天照大御神の命以ちて、天の安の河の河原に、八百萬の神を神集へに集へて、思金神に思はしめて詔りたまはく、「此の葦原の中つ國は我が御子の知らさむ國と言依さし賜へる國なり。故此の國と道速振る荒振る國つ神等の多なると以爲すは、是何れの神を使はしてか言趣けまし。」とのりたまひき。　爾に思金神及八百萬の神議りて、「天菩比神是遣はしてむ。」と白しき。　故天菩比神を遣はしつれば、乃て大國主神に媚び附

豐葦原之千秋長五百秋之水穂國　我國の美稱。千秋萬歲に榮えゆく農業國たる我日本の意。
言因さし　委託する。
天の浮橋　虛空に浮いてゐる橋。
さやぎて　騷いでの意。さやぐはさわぐの古語。
高御產巢日神　高天の原にあつて萬物の生成を掌る神。
天の安の河　天界にある河の意。
思金神　躍れて思ひ知る思慮の神。
道速振る　いちはやぶるのいを省いたもので、猛威を振舞ふ意。次の荒振るの修飾語に置いたもの。
言趣け　歸順。

きて、三年に至るまで、復奏さざりき。

是を以て高御產巢日神・天照大御神、亦諸の神等に問ひたまはく、「葦原の中つ國に遣はせる天菩比神久しく復奏さず。亦何れの神を使はしてか言趣けむ。」爾に思金神答白しけらく、「天津國玉神の子天若日子を遣はしてむ。」とまをしき。　故爾に天之麻迦古弓、天之波波矢を天若日子に賜ひて遣はしき。是に天若日子其の國に降り到りて、卽ち大國主神の女下照比賣を娶とし、亦其の國を獲むと慮りて、八年に至るまで復奏さざりき。　故爾に天照大御神・高御產巢日神、亦諸の神等に問ひたまはく、「天若日子久しく復奏さず。　又曷れの神を遣はして、天若日子が淹留る所由を問はしめむ。」とひたまひき。　於是諸の神及思金神答白さく、「雉名鳴女を遣はしてむ。」とまをす時に詔りたまはく、「汝行きて天若日子に問はむ

吉けむ　善けむと同じ。
天之麻迦古弓　日本書紀一書に、天眞鹿兒弓とあると同一で、鹿を射る狩獵用の弓。
天之波波矢　天之羽羽矢で、羽張矢の意と古事記傳に言つてゐる。
雉名鳴女　雉で名は鳴女といつたもの。

狀は、「汝を葦原の中つ國に使はせる所以は、其の國の荒振る神等を言趣け和せとなり。何八年に至るまで復奏さざる。」ととへ。」とのりたまひき。

故爾に鳴女天より降り到きて、天若日子が門なる湯津楓の上に居て、まつぶさに天つ神の詔命の如言りき。爾に天佐具賣此の鳥の言ふことを聞きて、天若日子に語げて言はく、「此の鳥は鳴く音甚惡し。故射殺したまひね。」と云ひ進むれば、卽ち天若日子天つ神の賜へる天之波士弓、天之加久矢を持ちて、其の雉を射殺しつ。爾に其の矢雉の胸より通りて、逆さまに射上げらえて、天の安の河の河原に坐します、天照大御神・高木神の御所に逮りき。是の高木神は高御產巢日神の別名なり。故高木神其の矢を取らして見そなはすれば、其の矢の羽に血著きたりき。於是高木神、「此の矢は天

湯津楓　五百箇楓。枝の繁茂してゐた桂。
まつぶさ　まは接頭語。つぶさに。つまびらかに。
天佐具賣　天の探女の意で、人の心をさぐる役をする女。
天之波士弓　波士は檀のこと、檀で作つた弓。
天之加久矢　加久は鹿兒の音の轉じたもの。

若日子に賜へりし矢ぞかし。」と告りたまひて、卽ち諸の神等に示せて詔りたまへらく、「若し天若日子、命を誤へず惡神を射たりし矢の至つるならば、天若日子に中らざれ。或し邪心有らば、天若日子此の矢に麻賀禮。と云りたまひて、其の矢を取らして、其の矢の穴より衝き返し下したまへば、天若日子が胡床に寢たる高胸坂に中りて死せにき。此れ還矢恐るべしといふ本なり。亦其の雉還らず。故今に諺に雉の頓使と曰ふ本是なり。

故天若日子が妻下照比賣の哭かせる聲、風の與響きて天に到りき。於是天在天若日子が父、天津國玉神及其の妻子ども聞きて、降り來て哭き悲しみて、乃ち其處に喪屋を作りて、河雁を岐佐理持とし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を碓女とし、雉を哭女とし、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を

麻賀禮　禍あれの約つたもの。矢の穴　下から射通して來た矢の穴をいふ。
胡床　椅子或は寢臺のやうなもの。足座。
高胸坂　仰向いて寢てゐたから胸の高くなつてゐる所をいふ。
頓使　行つたきりで戻らない使。
與　共の意。
喪屋　死者を假に納めて置く家。
岐佐理持　棺の傍に副うて食物の笥を持つて行くもの。
掃持　喪屋を掃除する箒を持つて行くもの。

遊びたりき。此の時阿遲志貴高日子根神到まして、天若日子が喪を弔ひたまふ時に、天より降り到つる、天若日子が父亦其の妻皆哭きて、「我が子は死なずて有りけり。」「我が君は死なずて坐しけり。」と云ひて、手足に取り懸りて哭き悲しみき。其の過てる所以は、此の二柱の神の容姿甚能く相似たり。故是を以て過てるなりけり。

於是阿遲志貴高日子根神太く怒りて曰ひけらく、「我は愛しき友なれこそ弔ひ來つれ。何とかも吾を穢き死人に比ふる。」といひて、御佩かせる十掬劍を拔きて其の喪屋を切り伏せ、足以て蹶ゑ離ち遣りき。此は美濃國の藍見河の河上なる喪山といふ山なり。其の持ちて切れる大刀の名は大量と謂ふ。亦の名は神度劍とも謂ふ。

於是天照大神詔りたまはく、「亦曷れの神を遣はしてば吉

翠鳥　かはせみのこと。
御食人　死者に供する食物を供へるもの。
碓女　米を舂くもの。
哭女　葬送の時に泣く役。
遊び　葬儀を行ふこと。
十掬劍　十拳劍のこと。前出。
藍見河　美濃國武儀郡を流れる郡上川をいふ。
大量　大刄刈の意。
神度劍　鋭い劍。神は美稱。又、出雲の神門產の劍といふ說もある。

けむ。」爾思金神及諸の神白しけらく、「天の安の河の河上の天の石屋に坐す、名は伊都之尾羽張神是遣はすべし。若し亦此の神ならずば、其の神の子建御雷之男神、此遣はすべし。且其の天尾羽張神は天の安の河の水を逆さまに塞き上げて、道を塞き居れば、他神は得行かじ。故別に天迦久神を遣はして、はして問ふべし。」とまをしき。故爾に天迦久神を使はして、天尾羽張神に問ふ時に、「恐し、仕へ奉らむ。然れども此の道には僕が子建御雷神を遣はすべし。」と答白して、乃ち貢進りき。爾天鳥船神を建御雷神に副へて遣はしき。

是を以て此の二柱の神、出雲の國の伊那佐の小濱に降り到きて、十掬劍を拔きて浪の穗に逆さまに刺し立てて、其の劍の前に趺み坐て、其の大國主神に問ひたまはく、「天照大御神・高木神の命以ちて問ひに使はせり。汝がうしはける葦

天の石屋　天上にある石で造った家。劍と石との關係が聯想せられる。
逆さまに云々　川の流を塞きて側の方へ水を引いてゐる。
伊那佐　粉樂の舊名。
逆さまに云々　劍の柄を下にして刺し立てる意。
趺み坐て　あぐらを組むこと。
うしはける　主として支配してゐる。

原の中つ國は、我が御子の知らさむ國と言依さし賜へり。故汝が心奈何にぞ。」ととひたまふ時に、答へ白さく、「僕は得白さじ。我が子八重事代主神是白すべきを、鳥の遊、取魚しに御大之崎に往きて、未だ還り來ず。」とまをしき。故爾に天鳥船神を遣はして、八重事代主神を徵し來て問ひ賜ふ時に、其の父の大神に、「恐し、此の國は天つ神の御子に立奉りたまへ。」と言ひて、卽ち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して隱りましき。

故爾に其の大國主神に問ひたまはく、「今、汝が子事代主神如此白しぬ。亦白すべき子有りや。」と問ひたまひき。於是亦白しつらく、「亦我が子建御名方神あり。此を除きては無し。」如此白したまふ折しも、其の建御名方神、千引石を手末に擎げて來て、「誰ぞ、我が國に來て忍び忍び如此物言ふ。然らば力競爲む。故我先づ其の御手を取らむ。」と言ふ。故其の御手を取らしむれば、卽ち立氷に取り成し、亦劍刃に取り成しつ。故爾懼れて退き居り。爾に其の建御名方神の手を取らむと乞ひ歸して取れば、若葦を取るが如、捻み批ぎて投げ離ちたまへば、卽ち逃げ去にき。故追ひ往きて科野國の洲羽の海に迫め到りて、殺さむとしたまふ時に、建御名方神白しつらく、「恐し、我を莫殺したまひそ。此の地を除きては他處に行かじ。亦我が父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此の葦原の中つ國は天つ神の御子の命の隨に獻らむ。」とまをしたまひき。

故更に且還り來て、其の大國主神に問ひたまはく、「汝が子等事代主神・建御名方神二神は、天つ神の御子の命の隨に違はじと白しぬ。故汝が心奈何にぞ。」と問ひたまひき。爾に

鳥の遊　鳥の狩獵。
御大之崎　出雲の美保の關にあたる。
天の逆手　天は美稱。逆手は呪をする時に打つ拍手。掌を逆にして拍つ。
青柴垣　青葉の柴で作つた垣。神を祀る時に設ける。
千引岩　非常に大きな岩。
手末　手の先。
立氷　下から立つてゐる氷柱。
取り成し　變化する。
乞ひ歸し　同じやうなことを申出る。
若葦　若若しい葦。
科野國　信濃國。
洲羽の海　諏訪湖。

答白へまつらく、「僕が子等二神の白せる隨に僕も違はじ。此の葦原の中つ國は命の隨に既に獻らむ。唯僕が住所を、天つ神の御子の天津日繼知しめさむ、登陀流天之御巢如して、底津石根に宮柱布斗斯理、高天の原に氷木多迦斯理て治め賜はば、僕は百足らず八十垌手に隱りて侍ひなむ。亦僕が子等百八十神は、八重事代主神、神の御尾前と爲りて仕へ奉らば、違ふ神はあらじ。」如此白して乃ち隱りましき。故建御雷神返り參上りて葦原の中つ國言向け和平しぬる狀を復奏したまひき。

四　海幸山幸

火照命は海佐知毘古と爲て、鰭の廣物、鰭の狹物を取りたまひ、火遠理命は山佐知毘古と爲て、毛の麤物、毛の柔物を取りたまひき。爾に火遠理命其の兄火照命に、「各に佐知を易へて用ゐてむ。」と謂ひて、三度乞はししかども許さざりき。然れども遂に纔に得易へたまひき。爾火遠理命海佐知を以ちて魚釣らすに、都て一魚も得たまはず。亦其の鉤をさへ海に失ひたまひき。於是其の兄火照命其の鉤を乞ひて、「山佐知も己が佐知佐知、海佐知も己が佐知佐知、今各佐知返さむ。」と謂ふ時に、其の弟火遠理命答曰りたまはく、「汝の鉤は魚鉤りしに一魚も得ずて、遂に海に失ひてき。」とのりたまへども、其の兄强ちに乞ひ徵りき。故其の弟御佩の十拳劍を破りて、五百鉤を作りて償ひたまへども取らず、亦一千鉤を作りて償ひたまへども受けずて、猶其の正本の鉤を得むとぞ云ひける。

於是其の弟海邊に泣き患ひて居ます時に、鹽椎神來て問

天津日繼　天照大御神の御繼嗣。
登陀流天之御巢　富足る御厨の意。
底津石根　地の底の石。
布斗斯理　太知り。太敷く。立派に立てる。
氷木　神社建築に見る千木のこと。
百足らず　八十の枕詞。
八十垌手　遠方。
海幸山幸　海の獲物、山の獲物。
火照命、火遠理命　共に邇邇藝能命の御子。
海佐知毘古　海幸彦。海の獲物を取る人。

鰭の廣物、鰭の狹物　大小樣樣の魚。
山佐知毘古　山幸彦。山の獲物を取る人。
毛の麤物、毛の柔物　大小樣樣の獸類。
佐知を易へて　獵具を交換して。
徵り　責めること。

ひけらく、「何にぞ虚空津日高の泣き患ひたまふ所以は。」ととへば、答へたまはく、「我兄と鉤を易へて其の鉤を失ひてき。是て其の鉤を乞ふ故に、多の鉤を償ひしかども受けずて、猶其の本の鉤を得むと云ふなり。故泣き患ふ。」とのたまひき。爾に鹽椎神、「我汝が命の爲に善き議せむ。」と云ひて、即ち無間勝間の小船を造りて、其の船に載せまつりて、教へけらく、「我其の船を押し流さば、差暫し往でませ。味御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、其綿津見神の宮なり。其の神の御門に到りましなば、傍の井の上に湯津香木有らむ。故其の上に坐しまさば、其の海神の女見て相議らむ者ぞ。」とをしへまつりき。

故教の隨に少し行でましけるに、備に其の言の如くなりしかば、即ち其の香木に登りてましまし き。爾に海神の女豐玉毘賣の從婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎて見れば、麗しき壯夫有り。甚異奇しと以爲ひき。爾火遠理命其の婢を見たまひて、「水を得しめよ。」と乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。爾に水をば飲みたまはずして、御頸の瑁を解かして口に含みて、其の玉器に唾き入れたまひき。於是其の瑁い器に著きて、婢瑁を得離たず。故瑁著けながら豐玉毘賣命に進りき。爾其の瑁を見て婢に、「若し門の外に人ありや。」と問ひたまへば、「我が井の上の香木の上に人坐す。甚麗しき壯夫にます。我が王にも益さりて甚貴し。故其の人水を乞はせる故に奉りしかば、水をば飲まずて、此の瑁をなも唾き入れたまへる。是得離たぬ故に、入れながら將ち來て獻りぬ。」と答白しき。爾豐玉毘賣命奇しと思ほして、出で見て乃ち見感でて

虚空津日高　日の御子の尊稱。

無間勝間　竹をこまかく編んで作つた籠。その上に皮を張つて船にした。

味御路　よい潮路。

魚鱗　うろこ。

玉器　酒や水を入れる器。玉は美稱。

唾き入れ　吐き入れる。唾きは動詞である。

瑁い　「い」は主格をあらはす助詞。

なも　助詞の「なむ」の古形。

其の父に、「吾が門に麗しき人有す。」と白したまひき。爾に海神自ら出で見て、「此の人は天津日高の御子、虛空津日高にませり。」と云ひて、即ち内に率て入れまつりて、美智の皮の畳八重を敷き、亦絁畳八重を其の上に敷きて、其の上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて御饗爲て、其の女豐玉毘賣を婚せまつりき。故三年といふまで其の國に住みたまひき。

於是火遠理命其の初の事を思ほして、大きなる歎一つしたまひき。故豐玉毘賣命其の歎を聞かして、其の父に白したまはく、「三年住みたまへども恒は歎かすことも無かりしに、今夜大きなる歎一つ爲たまひつるは、若し何の由故有るにか。」と言したまへば、其の父の大神其の聟夫に問ひまつらく、「今旦我が女の語るを聞けば、『三年坐しませども、恒は歎かすことなかりしに、今夜大きなる歎爲たまひつ。』と云せり。

天津日高　天皇の意。
美智　海馬。あじか。
絁畳　絹で作つた畳。
百取の机代　多くの禮物。聟取の結納にあたる。

若し由有りや。亦此間に到ませる由は奈何にぞ。」ととひまつりき。爾其の大神に、備さに其の兄の失せにし鉤を罰れる狀を語りたまひき。是を以て海神、悉に海之大小魚を召び集へて、「若し此の鉤を取れる魚有りや。」と問ひたまふ。故諸の魚ども白さく、「頃者赤海鯽魚なも喉に鯁ありて、物得食はずと愁ふなれば、必ず是が取りつらむ。」とまをしき。於是赤海鯽魚の喉を探ぐりしかば鉤有り。即ち取り出でて清洗して、火遠理命に奉る時に、其の綿津見大神誨へまつりけらく、「此の鉤を其の兄に給はむ時に言りたまはむ狀は、『此の鉤は淤煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤』と云ひて後手に賜へ。然して其の兄高田を作らば、汝が命は下田を營りたまへ。其の兄下田を作らば、汝が命は高田を營りたまへ。然爲たまはば、吾水を掌れば、三年の間必ず其の兄貧窮しくなりなむ。

罰れる　前出の「徵る」に同じ。
鯁　咽喉に刺さつた骨。
淤煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤　何れも呪ひの不吉の語。後手に賜へ　後手で返せ。即ち不吉な態度である。
高田　高い土地に作つた田。乾燥する田。
下田　窪田。水の多い田。
掌る　司る。支配する。

若し其然爲たまふ事を恨怨みて攻戰めなば、鹽盈珠を出して溺らし、若し其愁ひ請さば、鹽乾珠を出して活し、此如して惚苦めたまへ。」と云して、鹽盈珠鹽乾珠併せて兩箇を授けまつりて、卽ち悉に和邇魚どもを召び集へて問ひたまはく、「今天津日高の御子、虛空津日高上つ國に出幸でまさむとす。誰は幾日に送りまつりて覆奏さむ。」とひたまひき。故各己が身の尋長の隨に日を限りて白す中に、一尋和邇、「僕は一日に送りまつりて還り來なむ。」と白す。故爾其の一尋和邇に、「然らば汝送り奉りてよ。若し海中を渡る時に、な惶畏ませまつりそ。」と告りて、卽ち其の和邇の頸に載せまつりて、送り出しまつりき。故期が如、一日の內に送り奉りき。其の和邇返りなむとせし時に、佩かせる紐小刀を解かして、其の頸に著けてなも返したまひける。故其の一尋和邇をば、今

鹽盈珠　潮が滿ちて來る珠。
鹽乾珠　潮を引かせる珠。
惚苦め　苦しめこらす。
上つ國　現世。海神國より上にあるから。

に佐比持神とぞ謂ふなる。

是を以て備さに海神の教へし言の如くして、其の鉤を與へたまひき。故爾自以後稍愈貧しくなりて、更に荒き心を起して迫め來。攻めむとする時は、鹽盈珠を出して溺らし、其愁ひ請せば、鹽乾珠を出して救ひ、如此して惚苦めたまふ時に、稽首み白さく、「僕は今より以後、汝が命の夜晝の守護人と爲りてぞ仕へ奉らむ。」とまをしき。

五　神武天皇の御東征

神倭伊波禮毘古命其の伊呂兄五瀨命と二柱、高千穗の宮に坐しまして議りたまはく、「何れの地に坐さばか、天の下の政をば平けく聞し看さむ。猶東のかたにこそ行でませめ。」とのりたまひて、卽ち日向より發たして筑紫に幸行でまし

稽首み　祈る意。謝罪する。
伊呂兄　同母兄。「いろ」は親愛をあらはしていふ。
二柱　二人。柱は神を數へる場合にいふ單位。
高千穗の宮　高千穗の峯の近くにあつた宮。

き。故豐國の宇沙に到りませる時に、其の土人名は宇沙都比古、宇沙津比賣二人、足一騰宮を作りて大御饗獻りき。其地より還移らして、筑紫の岡田の宮に一年坐しましき。亦其の國より上り幸でまして、阿岐國の多祁理の宮に七年坐しましき。亦其の國より還り上り幸でまして、吉備の高島の宮に八年坐しましき。故其の國より上り幸でます時に、龜の甲に乘りて釣しつゝ打ち羽擧り來る人、速吸門に遇ひき。爾喚び歸せて、「汝は誰ぞ。」と問はしければ、「僕は國つ神、名は宇豆毘古。」と答曰しき。又、「汝は海道を知れりや。」と問はしければ、「能く知れり。」と答曰しき。又、「從に仕へ奉らむや。」と問はしければ、「仕へ奉らむ。」と答曰しき。故爾ち槁機を指し度して、其の御船に引き入れて、卽ち槁根津日子と號ふ名を賜ひき。此は倭の國造等が祖なり。

豐國　豐前、豐後。
宇沙　今の豐前國宇佐郡一帶をいふ。
足一騰宮　簡單な宮。
大御饗　大饗宴。
岡田の宮　筑前國遠賀郡にあつた。
阿岐國　安藝國。
多祁理の宮　所在がはつきりしない。安藝郡府中村といふ說もある。
吉備　備前、備中、備後。
高島の宮　備前、備中といふ兩說がある。
羽擧り　鳥が羽叩きするやうに。
速吸門　伊豫と豐後との海峽。佐賀關海峽。
槁機　棹。
國造　行政區劃たる國の長。

故其の國より上り行でます時に、浪速の渡を經て、青雲の白肩津に泊てたまひき。此の時登美の那賀須泥毘古軍を興して、待ち向へて戰ひしかば、御船に入れたる楯を取りて下り立ちたまひき。故其地の號を楯津と謂けつるを、今は日下の蓼津となも云ふ。於是登美毘古と戰ひたまふ時に、五瀨命御手に登美毘古が痛矢串を負はしき。故爾に詔りたまはく、「吾は日の神の御子にして、日に向ひて戰ふこと良はず。故賤奴が痛手をなも負ひつる。今よりはも行き廻りて、日を背負ひてこそ擊ちてめ。」と期りたまひて、南の方より廻り幸でます時に、血沼の海に到りて、其の御手の血を洗ひたまひき。故血沼の海とは謂ふなり。其地より廻り幸でまして、紀國の男之水門に到りまして詔りたまはく、「賤奴が手を負ひてや死ぎなむ。」と男健して崩りましぬ。故其の

浪速の渡　難津の濱。
青雲の　白の枕詞。
白肩津　河內の草香江のほとり。登美、大和の鳥見郷。今の生駒郡富雄村。
日下の蓼津　草香江の津。
痛矢串　深手の矢。
行き廻り　迂廻して。
血沼の海　和泉灘。
男之水門　所在がはつきりしない。
男健　勇しく立つこと。
崩り　神上り。神となつて天に上る。

水門を男水門とぞ謂ふ。陵は卽て紀國の竈山にあり。

故、神倭伊波禮毘古命其地より廻り幸でまして熊野村に到でませる時に、大なる熊髣髴に出で入りて卽ち失せぬ。爾に神倭伊波禮毘古命倏急に遠延まし、及御軍も皆遠延て伏しぬ。此の時に熊野の高倉下一横刀を齎ちて、天つ神の御子の伏せる地に到て獻る時に、天つ神の御子卽ち寤起めまして、「長寢しつるかも。」と詔りたまひき。故其の横刀を受け取りたまふ時に、其の熊野山の荒ぶる神自ら皆切り仆さえて、爾ち其の惑え伏せる御軍悉に寤起めたりき。故天つ神の御子其の横刀を獲つる所由を問ひたまへば、高倉下答曰さく、「己夢に、天照大神・高木神二柱の神の命以ちて、建御雷神を召して詔りたまはく、『葦原の中つ國はいたくさやぎてありなり。我が御子等不平み坐すらし。其の葦原の中つ

竈山　紀伊國海草郡三田村にある。

熊野村　紀伊國牟婁郡。

遠延　毒氣にふれて昏睡狀態になる。

高倉下　靈劍を納めてゐる倉の主。高倉主の意。

不平み　病み惱む意。

國は專ら汝が言向けつる國故、汝建御雷神降りてよ。』とのりたまひき。爾に答曰さく、『僕降らずとも、專ら其の國平けし横刀有れば降してむ。此の刀の名は佐士布都神と云ふ。亦の名は甕布都神と云ふ。亦の名は布都御魂。此の刀は石の上の神の宮に坐す。此の刀を降さむ狀は、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむ。』とまをしたまひき。故建御雷神教へたまはく、『汝が倉の頂を穿ちて、此の刀を墮し入れむ。故阿佐米余玖汝取り持ちて、天つ神の御子に獻れ。』とをしへたまひき。故夢の教の如に、旦己が倉を見しかば、信に横刀有りき。故是の横刀は獻るにこそ。』とまをしき。

於是亦高木大神の命以ちて、覺し白したまはく、『天つ神の御子、此より奥つ方に莫入幸りましそ。荒ぶる神甚多かり。今天より八咫烏を遣せむ。故其の八咫烏道引きてむ。其

石の上の神の宮　大和國丹波市町布留。今は官幣大社石上神宮。

阿佐米余玖　朝日善く。日が覺めて吉なるものを見る。

旦　翌朝。

八咫烏　大烏の義。

の立たむ後より幸行でますべし。」とさとしまをしたまひき。故其の教覺の隨に、其の八咫烏の後より幸行でましししかば、吉野河の河尻に到りましし時に、筌を作ちて魚取る人有りき。爾に天つ神の御子、「汝は誰ぞ。」と問はしければ、「僕は國つ神、名は贄持の子。」と答曰しき。此は阿陀の鵜養の祖なり。其地より幸行でませば、尾生る人井より出で來。其の井光れり。爾ち、「汝は誰ぞ。」と問はせば、「僕は國つ神、名は井氷鹿。」と答曰しき。此は吉野首等が祖なり。卽て其の山に入りまししかば、亦尾生る人遇へり。此の人巖を押し分けて出で來。爾ち、「汝は誰ぞ。」と問はせば、「僕は國つ神、名は石押分の子、今天つ神の御子幸行でますと聞ける故に、參向へまつるにこそ。」と答曰しき。此は吉野の國巢の祖なり。其地より蹈み穿ち越えて、宇陀に幸でましき。故宇陀之穿とぞいふ。

筌　竹で作つた魚を取る漁具。

阿陀　大和國宇智郡阿田村。

鵜養　鵜養部。一種の職業を持つ部族團體。

首　大人の義。姓の一。

國巢　吉野川の上流にある地名。其他各地にもあり、先住民の住んでゐた所。

宇陀之穿　宇陀郡宇賀志村。

故爾に宇陀に、兄宇迦斯、弟宇迦斯と二人有りけり。故先づ八咫烏を遣はして、二人に、「今天つ神の御子幸行でませり。汝等仕へ奉らむや。」と問はしめたまひき。於是兄宇迦斯、鳴鏑を以ちて其の使を待ち射返しき。故其の鳴鏑の落ちたりし地を訶夫羅前と謂ふ。待ち擊たむと云ひて軍を聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へ奉らむと欺陽りて大殿を作り、其の殿内に、押機を作りて待ちける時に、弟宇迦斯先づ參向へて、拜みて曰さく、「僕が兄兄宇迦斯、天つ神の御子の使を射返し、待ち攻めむとして、軍を聚むれども得聚めざれば、殿を作り其の内に押機を張りて待ち取らむとす。故參向へて顯し白す。」とまをしき。爾に大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して罵詈りて云ひけらく、「伊賀作り仕へ奉れる大殿内には意禮先づ入りて、其の

鳴鏑　鏑矢。

訶夫羅前　所在不明。

押機　陷穽。おとし。

罵詈りて　辱めていふ。

伊賀　おれ。卑稱の二人稱の代名詞。

仕へ奉らむと爲る狀を明しまをせ。」といひて、卽ち横刀の手上握り、矛由氣矢刺して追ひ入るる時に、乃ち己が作りおける押に打たえて死にき。卽ち控き出して斬り散りき。故其地を宇陀の血原となも謂ふ。

其地より幸行でまして、忍坂の大室に到りませる時に、尾ある土雲八十建其の室に在りて、待ち伊那流。故爾に天つ神の御子の命以ちて、八十建に饗を賜ひき。於是八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けて、其の膳夫等に、歌を聞かば一時共に斬れ。」と誨へたまひき。故其の土雲を打たむとすることを明かせる歌、

忍坂の　大室屋に　人さはに　來入り居り　人さはに　入り居りとも　みつみつし　久米の子が　頭椎い　石椎いもち　擊ちてしやまむ　みつみつし

手上　劍の柄。
矛由氣　矛を操り扱ふこと。
矢刺し　矢を弓に番へる。
血原　所在不明。
忍坂の大室　大和國磯城郡忍坂村にある岩窟。
土雲　書記に土蜘蛛とある。穴居してゐた先住民。
待ち伊那流　怒り猛つて待つて居る。
八十膳夫　多くの膳部の係。
さは　多くの義。
みつみつし　久米の枕詞。
久米の子　久米命の率ゐる久米部をいふ。

し　久米の子等が　頭椎い　石椎いもち　今擊たば善らし

如此歌ひて、刀を拔きて一時に打ち殺しつ。

然後登美毘古を擊ちたまはむとせし時の歌曰、

みつみつし　久米の子等が　粟生には　韮一莖、其根が莖　其根芽つなぎて　擊ちてしやまむ

又歌曰、

みつみつし　久米の子等が　垣下に　植ゑし薑
口ひびく　吾は忘れじ　うちてしやまむ

又歌曰、

神風の　伊勢の海の　大石に　はひもとほろふ
細螺の　い這ひもとほり　うちてしやまむ

故爾に邇藝速日命參赴て、天つ神の御子に白さく、「天つ神

頭椎い石椎い　刀の柄頭の大きなもの。柄頭を石で作つたもの。
「い」は助詞の「を」にあたる。主格につく場合もある。
粟生　粟畑。
韮　にらのこと。
其根芽つなぎて　其の根も芽も諸共に。登美毘古及び部下をいふ。
口ひびく　口がびり〳〵する。
神風　伊勢の枕詞。
はひもとほろふ　這ひ廻はるの意。
細螺　きさごといふ貝。
い這ひ　「い」は接頭語。

の御子天降り坐しぬと聞きつる故に、追ひて參降り來つ。」とまをして、卽ち天津瑞を獻りて、仕へ奉りき。故此の如荒夫琉神等を言向け平和し、不伏人等を退ひ撥げたまひて、畝火の白檮原の宮に坐しまして天の下治しめき。

六　倭建命

天皇小碓命に詔りたまはく、「西の方に熊曾建二人有り。是不伏無禮人等なり。故其の人等を取れ。」とのりたまひて遣はしき。此の時に當りて其の御髮額に結はせり。爾に小碓命其の嫂倭比賣命の御衣、御裳を給はり、小劍を御懷に納れて幸行でましき。

故熊曾建が家に到りて見たまへば、其の家の邊に軍三重に圍み、室を作りてぞ居りける。於是新室樂爲むと云ひ動

天津瑞　天神の御子なるしるし。
白檮原　畝傍山の東南橿原の地。
天皇　景行天皇を申す。
熊曾建二人　厚鹿文・迮鹿文といふ熊襲の渠帥。
御髮額に云々　少年風の結方。
軍三重に云々　軍人を三重にして家を圍んで守らしめて居る。
新室樂　新築落成の宴。

みて、食物を設け備へたりき。故其の傍を遊行きて、其の樂する日を待ちたまひき。爾に其の樂の日に臨りて、其の結はせる御髮を、童女の髮の如梳り垂れ、其の姨の御衣、御裳を服して、既に童女の委に成りて、女人どもの中に交り立ちて、其の室內に入り坐しき。爾に熊曾建兄弟二人其の孃子を見感でて、己が中に坐せて盛に樂げたり。故其の酣なる時に臨りて、懷より劍を出し、熊曾が衣の衿を取りて、劍以て其の胸より刺し通したまふ時に、其の弟建見畏みて逃げ出でき。乃ち其の室の椅の本に追ひ至りて、其の背を取へて劍以て尻より刺し通したまひき。爾に其の熊曾建白言しつらく、「其の刀を莫動かしたまひそ。僕白すべき言有り。」とまをす。爾暫し許して押し伏せたまふ。是於白言しつらく、「汝が命は誰にますぞ。」「吾は纒向之日代宮に坐しまして大八

衿　襟。
椅の本　階段の下。
纒向之日代宮　大和國磯城郡纒向村大字穴師の邊に當る。

島國知しめす、大帶日子淤斯呂和氣天皇の御子、名は倭男具那王にます。意禮熊曾建二人不伏無禮と聞し看して、意禮を取殺れと詔りたまひて遣はせり。」と詔りたまひき。爾に其の熊曾建、「信に然まさむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭國に吾二人に益して、建き男は坐しけり。是を以て吾御名を獻らむ。自今以後倭建御子と稱へまをすべし。」と白しき。是の事白し訖へつれば、卽ち熟苽の如振り拆きて殺したまひき。故其の時よりぞ御名を稱へて、倭建命とは謂しける。然して還り上ります時に、山神、河神及穴戸神を皆言向け和して參上りましき。

卽ち出雲の國に入り坐して、其の出雲建を殺らむと欲ほして到りまして、卽ち結友したまひき。故竊に赤檮以て刀作り詐して御佩かして、共に肥の河に沐みしたまひき。爾

大倭國　大和國の美稱。

熟苽　熟落ちの瓜の意。熟した瓜は裂け易い故にいふ。

穴戸神　要害の地に居る荒ぶる神。

結友　こゝは僞つて親しまれたこと。

に倭建命河より先づ上りまして、出雲建が解き置ける横刀を取り佩かして、「刀易爲む。」と詔りたまふ。故後に出雲建河より上りて倭建命の詐刀を佩きき。於是倭建命、「いざ刀合さむ。」と誂へたまふ。爾各其の刀を拔く時に、出雲建詐刀を得拔かず。卽ち倭建命其の刀を拔かして、出雲建を打ち殺したまひき。爾御歌曰したまはく、

やつめさす　出雲建が　佩ける大刀　つづらさは
纏き　さみなしにあはれ

故如此撥ひ治げて、參上りて覆奏したまひき。

爾に天皇亦頻きて倭建命に、「東の方十二道の荒ぶる神及まつろはぬ人等を言向け和平せ。」と詔りたまひて、吉備臣等が祖名は御鉏友耳建日子を副へて遣はす時に、比比羅木之八尋矛を給ひき。故命を受けたまはりて罷り行でます時

刀合せ　試合。

やつめさす　入雲さすと同じ。出雲の枕詞。

つづらさは纏き　葛蔓が多く卷きつけてある。

さみ　中身。

頻きて　重れて。

十二道　伊勢・尾張・參河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模・武藏・總・常陸・陸奥をいふ。

比比羅木之云々　柊で作つた鉾。

に、伊勢の大御神の宮に參入りまして、神の朝廷を拜みたまふ。其の姨倭比賣命草那藝劍を賜ひ、亦御囊を賜ひて、「若し急の事有らば、茲の囊の口を解きたまへ。」となも詔りたまひける。

故東の國に幸でまして、山河の荒ぶる神及不伏人等を悉に言向け和平したまひき。故爾に相武國に到りませる時に、其の國造詐りて白さく、「此の野の中に大沼有り。是の沼の中に住める神甚く道速振る神なり。」とまをす。於是其の神を看行しに其の野に入り坐しつれば、其の國造其の野に火をなも著けたりける。故欺かえぬと知しめして、其の姨倭比賣命の給へる囊の口を解き開けて見たまへば、其の裏に火打ぞ有りける。於是先づ其の御刀以て草を苅り撥ひ、其の火打を以ちて火を打ち出で、向火を著けて、燒き退けて

神の朝廷　大神宮。

向火　こちらから火をつけること。

還り出でまして、其の國造等を皆切り滅し、卽ち火を著けて燒きたまひき。故其地をば今に燒遣とぞ謂ふ。

其より入り幸でまして走水海を渡ります時に、其の渡の神浪を興てて、船廻ひて得進み渡りまさず。爾に其の后、名は弟橘比賣命白したまはく、「妾御子に易りて海中に入りなむ。御子は所遣の政遂げて覆奏したまふべし。」とまをして、海に入りまさむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、絁疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。於是其の暴浪自ら伏ぎて、御船得進みき。故七日ありて後に、其の后の御櫛海邊に依りたりき。乃ち其の櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

阿豆麻の國より越えて甲斐に出でて、酒折の宮に坐しましける時に歌ひたまはく、

燒遣　今の燒津。

走水海　浦賀海峽。

所遣の政　委任された政。

菅疊　菅で作つた疊。

酒折の宮　甲斐國四山梨郡里垣村にある。

にひばり・筑波を過ぎて　幾夜か寢つる

爾に其の御火燒の老人御歌を續ぎて歌ひけらく、

かがなべて　夜には九の夜　日には十日を

是を以て其の老人を譽めて、東の國造にぞなしたまひける。

にひばり　筑波の枕詞。常陸國新治郡新治郷をいふ。

御火燒　夜警の篝火を焚いてゐる翁。

かがなべて　日日並べての意。日を重ねて。

詳註古事記粹　終

東京帝國大學教授
文學博士　藤村作編

詳註祝詞粹

株式會社　帝國書院

詳註

祝詞粹

目次

一　祈年祭　一
二　六月晦大祓（十二月准之）　六

目次終

一　祈年祭

集侍はれる神主、祝部等諸聞し食せと宣る。（神主、祝部等共に唯と稱す。餘の宣るといふも此に准ふ。）

高天の原に神留り坐す、皇睦神漏伎、神漏彌命以ちて、天つ社國つ社と稱辭竟へ奉る。皇神等の前に白さく、今年二月に、御年初め賜はむとして、皇御孫命の宇豆の幣帛を、朝日の豐榮登に稱辭意へ奉らくと宣る。

御年の皇神等の前に白さく。皇神等の依さし奉らむ奥津御年を、手肱に水沫搔垂り、向股に泥搔寄せて、取作らむ奥をば千穎八百穎に奉り置きて、瓮の閉高知り、瓮の腹滿て雙べて、汁にも穎にも稱辭竟へ奉らむ。大野の原に生ふる物

祝詞（ノリト）　のりとごとの略である。神に對して願望を奏するものである。素樸な古代人の生活が描かれた貴重な文獻である。

祈年祭　毎年二月四日に神祇官、國司の廳に於いて行はれ、穀物の豐穣を祈請する祭。

集侍はれる　多くの者が集つて侍つてゐる意。

神主　神に仕へる者の主の義。

祝部　祭祀を掌る者。

神留り　神が留まつてゐること。

皇睦　天皇の親しい皇祖神。

神漏伎・神漏彌　男女の皇祖神をいふ。

命　仰言の意。

天つ社國つ社　天神地祇。

稱辭意へ奉る　祭る意。

御年初め云々　御年は特に米のことにいふ。稻作を始めること。

皇御孫命　ここでは天皇を申す。

宇豆の幣帛　珍貴な御供物。

朝日の云々　朝日のさしのぼる頃。

奥津御年　晩く實る穀物。即ち米をいふ。

手肱に云々　手の肱で水の泡を

は、甘菜、辛菜、青海原に住む物は、鰭の廣物、鰭の狹物、奥津藻菜、邊津藻菜に至るまでに、御服は明妙、照妙、和妙、荒妙に稱辭竟へ奉らむ。御年の皇神の前に、白き馬、白き猪、白き鷄、種種の色物を備へ奉りて、皇御孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

大御巫の辭竟へ奉る。　皇神等の前に白さく。　神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主と御名は白して、辭竟へ奉らば、皇御孫命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉るが故に、皇吾睦神漏伎命神漏彌命と、皇御孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

座摩の御巫の稱辭竟へ奉る。　皇神達の前に白さく。　生井、榮井、津長井、阿須波、波比支と御名は白して、辭竟へ奉らば、

かき垂らして。農夫の水田に立働くさまをいふ。
八束穂　幾握もある長い稻穂。
伊加志穂　嚴し穂。立派な稻。
千穎八百穎　澤山の稻。
瓶の閉高知り　瓶の高いのに酒を充分入れての義。瓶は酒を入れる器。
明妙、照妙、和妙、荒妙　妙は織物の總稱に用ゐられてゐる。明、照は共に光澤方面、和、荒は織地の種類から分けたのである。
大御巫　御巫は巫女で、神の心を和がす者である。大は巫女中の格式のあるものを指したのであらう。
神魂、高御魂　萬物生成の神たる神産巢日、高御産巢日の神をいふ。
生魂、足魂　生成、滿足の意を冠したのである。「生」と「足」とは對立してゐる。
玉留魂　鎭魂の意で人間の精神を統一する神。
大宮乃賣　忌部氏の祀つてゐた神で、天照大御神が天の岩戸からお出でましになつた時に侍つた神。

皇神の敷き坐す、下都磐根に宮柱太知り立て、高天の原に千木高知りて、皇御孫命の瑞の御舍を仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隱り坐して、四方の國を安國と平らけく知し食すが故に、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。

御門の御巫の稱辭竟へ奉る。　皇神等の前に白さく。　櫛磐間門命、豐磐間門命と御名は白して辭竟へ奉らば、四方の御門に、湯都磐村の如く塞り坐して、朝には御門を開き奉り、夕には御門を閉て奉りて、疎ぶる物の、下より往かば下を守り、上より往かば上を守り、夜の守、日の守に守り奉るが故に、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。

生島の御巫の辭竟へ奉る。　皇神等の前に白さく。　生國、足國と御名は白して辭竟へ奉らば、皇神の敷き坐す嶋の八十嶋は、谷蟆の狹度る極、鹽沫の留まる限、狹き國は廣く、峻し

大御膳都神　食物の神。
辭代主　大國主神の子。事代主神ともいふ。
手長　たは接頭語。
堅磐に常磐に　永久不變に。
座摩　住居の土地を領知する神。
生井、榮井、津長井　井水の永遠性を冠したのである。
阿須波、波比支　住居、庭の守護神。
瑞の御舍　立派な御殿。
天の御蔭、日の御蔭　天日を覆ふ意。
御門の御巫　御門の神に奉仕する巫女。
湯都磐村　多くの石群。
塞り　防ぐこと。
疎ぶる物　邪神をいふ。

生島　日本國の靈を祭つた神。
谷蟆　ひきがへるのこと。
鹽沫　潮流の泡。
峻しき國　險阻な國。

き國は平らけく、嶋の八十嶋墜つる事無く、皇神等の依さし奉るが故に、皇御孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

辭別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく。皇神の見霽かし坐す四方の國は、天の壁立つ極、國の退立つ限、青雲の靄く極、白雲の墜坐向伏す限、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留まる極、大海原に舟滿ちつづけて、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限、長道間無く立ちつづけて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打挂けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷の前は皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、殘をば平らけく聞し看さむ。又皇御孫命の御世を、手長の御世と、堅磐常磐に齋ひ奉り、茂し御世に

辭別きて　特に。「別く」は古くは四段に活用した。
見霽かし　見渡す。
天の壁立つ　蒼天が垣のやうにある。
退立つ　遠く離れた果。
棹柁干さず　舟の休息することなく。
さくみ　踏み通る。
荷前　伊勢大神宮及び諸陵に諸國から初物を奉ること。
殘云々　初穗の殘をば天皇が召上る。

幸はへ奉るが故に、皇吾が睦神漏伎、神漏彌命と、宇事物頸根衝き拔きて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。

御縣に坐す皇神等の前に白さく。高市、葛木、十市、志貴、山邊、曾布と御名は白して、此の六つの御縣に生り出づる、甘菜、辛菜を持ち參來て、皇御孫命の長御膳の遠御膳と聞し食すが故に、皇神孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

山口に坐す皇神等の前に白さく。飛鳥、石村、忍坂、長谷、畝火、耳無と御名は白して、遠山近山に生ひ立てる、大木小木を本末打切りて持ち參來て、皇御孫命の瑞の御舍仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隱り坐して四方の國を安國と平らけく知し食すが故に、皇御孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

宇事物　鵜の如く。
頸根　頸。
御縣　朝廷の御料地。
長御膳の云々　長く遠く聞し召す御食。
山口　御料林の山の入口。

水分に坐す皇神等の前に白さく。吉野、宇陀、都祁、葛木と御名は白して辭竟へ奉らば、皇神等の寄さし奉らむ奥津御年を、八束穂の伊加志穂に寄さし奉らば、皇神等に初穂は穎にも汁にも、瓮の閉高知り、瓮の腹滿て雙べて稱辭竟へ奉りて、殘をば皇御孫命の朝御食夕御食の加牟加比に、長御食の遠御食と、赤丹の穂に聞し食すが故に、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくを、諸聞し食せと宣る。

辭別きて、忌部の弱肩に太多須支取挂けて、持ち由麻波利仕へ奉れる幣帛を、神主、祝部等受け賜はりて、事過たず捧げ持ちて奉れと宣る。

水分　山の分水嶺。

加牟加比　神穎の意。即ち神前に供へる稻。

赤丹の穂　龍顔が赤らみ給ふこと。

由麻波利　齋むこと。

六月晦大祓　六月晦日に宮城の朱雀門にて行はれる行事で十二月にも行ふ。中臣が勅命を奉じて皇子、皇族其他百官群臣に讀み聞かせる宣命體のものである。中臣祓詞ともいふ。

二　六月晦大祓（十二月准之）

集侍はれる親王、諸王、諸臣、百宮人等、諸聞し食せと宣る。天皇が朝廷に仕へ奉る、比禮挂くる伴男、手襁挂くる伴男、靫負ふ伴男、劒佩く伴男、伴男の八十伴男を始めて、官官に仕へ奉る人等の、過ち犯しけむ雜雜の罪を、今年の六月の晦の大祓に、祓へ給ひ清め給ふ事を、諸聞し食せと宣る。

高天の原に神留り坐す、皇親神漏伎、神漏彌命以ちて、八百萬の神等を神集へ集へ賜ひ、神議り議り賜ひて、我が皇御孫之命は、豐葦原の水穂の國を、安國を平らけく知し食せと事依さし奉りき。如此依さし奉りし國中に、荒振る神等をば、神問はしに問はし賜ひ、神掃ひに掃ひ賜ひて、語問ひし磐根樹立、草の垣葉をも語止めて、天の磐座放れ、天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて、天降し依さし奉りき。

如此依さし奉りし四方の國中と、大倭日高見の國を安國と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷き立て、高天の原に千木

比禮挂くる伴男　肩に領巾をかけた采女で陪膳を掌る。伴男は伴の緒の義で部屬の長である。

國中　國土のうちの意。

語問ひし　物を言ふ。

樹立　木の切株。

草の垣葉　草の片葉ともいふ。一片の葉の義である。

天の磐座　天孫の玉座。

國中　國の中央の意。前出のものと訓を異にする。

大倭日高見の國　大和の美稱。

高知りて、皇御孫命の美頭の御舍仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隱り坐して、安國と平らけく知し食さむ國中に、成り出でむ天の益人等が、過ち犯しけむ雜雜の罪事は、天津罪と、畔放、溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剝、逆剝、屎戸、許許太久の罪を天津罪と法り別けて、國津罪と、生膚斷、死膚斷、白人、胡久美、昆蟲の災、高津神の災、高津鳥の災、畜仆し、蠱物爲る罪、許許太久の罪出でむ。

如此出でば、天津宮事以ちて、大中臣、天津金木を本打切り末打斷ちて、千座の置座に置き足らはして、天津菅曾を本刈り斷ち末刈り切りて、八針に取碎きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。　如此乃良ば、天津神は天の磐門を押披きて、天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて聞し食さむ。　國津神は高山の末、短山の末に上り坐して、高山の伊穗理、短山の伊穗理

天の益人　青人草。人民。
畔放　田の境の畔を亂す。
溝埋　田へ水を引くために作つた溝を埋める。
樋放　水を田に引く時の管を放つ。
頻蒔　種を蒔いた上に又蒔く。
串刺　田の中に串を刺して農夫の妨害をする。
生剝・逆剝　生きてゐる動物の皮を剝ぐ。
屎戸　糞をひる。
許許太久の　澤山の。
生膚斷　皮膚を切つて血を出すこと。
死膚斷　死屍の穢にふれること。
白人　白子。皮膚が白くなる病。
胡久美　瘤や疣のあるもの。
昆蟲の災　害蟲の災。
高津神　雷神をいふ。
高津鳥　怪鳥天狗等。
畜仆し　飼畜を呪ひ殺す。
蠱物　呪咀をする。
天津宮事　天上の故事。
金木　小枝の意といふ。
千座の置座　祓物を載せる多くの臺。
菅曾　菅繕とも清麻ともいふ。
八針に云々　針で細かに割く。
伊頭の千別き　押分け開いて

を撥き別けて聞し食さむ。

如此聞し食してば、皇御孫之命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪といふ罪は在らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を舳解き放ち艫解き放ち、て、大海原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌以ちて打掃ふ事の如く、遺る罪は在らじと祓へ給ひ清め給ふ事を、高山の末短山の末より、佐久那太理に落ち多支都、速川の瀨に坐す瀨織津比咩と云ふ神、大海原に持ち出でむ。　如此持ち出で往なば、荒鹽の鹽の八百道の、八鹽道の鹽の八百會に座す、速開都比咩と云ふ神、持ち可可呑みてむ。　如此可可呑みてば、氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神、根國底之國に氣吹き放ちてむ。　如此氣吹き放ちてば、根國底之國

の意。伊頭は嚴しい意。
伊穗理　雲霧の立ちこめてゐる。
科戸の風　風をいふ。
大津邊　船の泊る水戸のほとり。
佐久那太理　さ下垂りの意。
八百會　多くの潮流の會ふ所。
持ち可可呑みて　がぶ〳〵と呑むこと。
氣吹戸　罪禍を根の國に吹き放つ所。
根國底之國　地底にある黃泉國。

二　六月晦大祓

に坐す速佐須良比咩と云ふ神、持ち佐須良比失ひてむ。如此失ひてば、天皇が朝廷に仕へ奉る官官の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて罪と云ふ罪は在らじと、高天の原に耳振り立てて聞く物と馬牽き立てて、今年の六月の晦の日の、夕日の降の大祓に、祓へ給ひ清め給ふ事を、諸聞し食せと宣る。四國の卜部等、大川道に持ち退り出でて、祓ひ却れと宣る。

佐須良比　漂泊の意。

降　夕方。

四國の卜部　卜部は神祇官の役員。伊豆、壹岐から各五人。對馬（上下）から十人を補任する。

大川道　大川の意。

東京帝國大學教授
文學博士　藤村作編

詳註宣命粹

株式會社　帝國書院

詳註

宣命粹

目次

一　文武天皇御卽位の詔　一
二　聖武天皇改元の詔　五
三　聖武天皇群臣に賜ひし詔

目次終

一　文武天皇御卽位の詔

現つ御神と大八島國知ろしめす天皇が大命らまと詔りたまふ大命を、集侍はれる皇子等・王たち・臣たち・百官の人等、天の下の公民もろもろ聞し食さへと詔る。

高天の原に事始めて、遠天皇祖の御世御世、中今に至るまでに、天皇が御子のあれ坐さむ彌繼ぎ繼ぎに大八島國知らさむ次と、天つ神の御子ながらも、天に坐す神の依さし奉りしまにま、聞し看し來るこの天つ日嗣高御座の業と、現つ御神と大八島國知ろしめす倭根子天皇命の授け賜ひ負せ賜ふ、貴き高き廣き厚き大命を受け賜はり恐み坐して、この食國天の下を調へ賜ひ平らげ賜ひ、天の下の公民を惠び賜ひ撫で賜はむとなも神ながら思ほしめさくと詔りたまふ天

宣命〔センミヤウ〕　國文で書かれた詔勅で御卽位・神事・改元・立后・立太子等の際に神祇或は百官萬民に發布せられたもの。

文武天皇云々　文武天皇元年八月十七日の詔。

現つ御神　神として現世にある天皇を申す。

大八島　日本國の別名。「八」は「彌」で多い意。

らま　名詞・代名詞につく接尾語。たしかにいひ聞かす意がある。

集侍はれる　祝詞「新年祭」の項參照。

公民　大御寶の意で、こゝは天下の萬民をいふ。

詔る　宣命使がいつたのである。

中今　現今。

あれ　生れる。

次　次第。

御子ながらも　「も」は添へたる辭で、御子として。

高御座の業　天皇の御座にましまして天下を治め給ふ御業。

倭根子天皇命　天皇に對して申しあげる御稱。こゝは持統天皇を申す。

食國　しろしめす國。

皇が大命をもろもろ聞し食さへと詔る。

こゝをもて、百官の人等、四方の食國を治め奉れと任け賜へる國國の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷き行ひ賜へる國の法を過ち犯すことなく、明き淨き直き誠の心をもちて、いやすすみすすみて緩み怠ることなく、務め結りて仕へ奉れと詔りたまふ大命をもろもろ聞し食さへと詔る。

かれ、かくの狀を聞し食し悟りて、款しく仕へ奉らむ人は、その仕へ奉れらむ狀のまにま、品品讃め賜ひ上げ賜ひ治め賜はむものぞと詔りたまふ天皇が大命をもろもろ聞し食さへと詔る。

二　聖武天皇改元の詔

現つ御神とあめのしたしろしめす倭根子天皇が詔旨ら

任け　任せられた意。
宰等　國司をいふ。天皇の大命を承つてゐる故に。
いやすすみ云々　自ら心をはげましての意。
款しく　勤めて。
讃め賜ひ　褒美。
上げ賜ひ　冠位を上げ給ふこと。
治め賜はむ　いろ〳〵取行はせられよう。
聖武天皇云々　神龜六年八月癸亥に年號を天平と改元せられた時に大極殿に於いての詔。

まと勅りたまふ命を親王等・諸王等・諸臣等・百官の人等、天の下の公民もろもろ聞しめさへと宣る。

高天の原ゆ天降坐しし、天皇が御世を始めてこのかた、天官御座に坐して、天地八方を調へ賜ふことは、聖の君と坐して賢き臣供へ奉り、天の下平らけく、百の官安くしてし、天地の大瑞は顯れ來となも、神ながら思ほしめさくと詔りたまふ命をもろもろ聞しめさへと宣る。

かく詔りたまふは大命に坐せ皇朕が御世に當りては、皇と坐す朕も聞き持てること乏しく、見持てる行少み、朕が臣として供へ奉る人等も、一つ二つを漏らし落すこともあらむかと辱み愧かしみ思ほし坐して、我が皇太上天皇の大前に、恐こじもの進退ひ匍匐ひ廻ほり白し賜ひ受け賜はらくは、卿等の問ひし來む政をば、かくや答へ賜はむ、かくや答へ

ゆ　よりの意。
天地八方　四方八方などと同じく、天地を廣く見ていふ。
大瑞　奇瑞。
少み　少くして。少いので。「み」は次の辱み、愧かしみの「み」と同じ。
太上天皇　元正天皇を申す。
恐こじもの　畏多い樣子。
卿等　前つ君の意。天皇の前に伺候する侍臣。

賜はむと白し賜ひ、白し賜ふ官にや治め賜はむと白し賜へば、教へ賜ひおもぶけ賜ひ、答へ賜ひ、宣り賜ふまにまに、この食國天の下の政を行ひ賜ひ敷き賜ひつつ供へ奉り賜ふ間に、京職の大夫從三位藤原の朝臣麻呂等い、圖負へる龜一頭獻らくと奏し賜ふと聞しめし、驚き賜ひ怪しみ賜ひ、見そなはし、歡び賜ひ嘉で賜ひて思ほしめさくは、うつしくも皇朕が政の致せる物にあらめや。　こは太上天皇の厚き廣き德を蒙りて、高き貴き行に依りて顯れける大瑞の物ぞと詔りたまふ命をもろもろ聞しめさへと宣る。

辭別きて詔りたまはく、この大瑞の物は天に坐す神、地に坐す神の相うづなひ奉り、福はへ奉ることに依りて、顯しく出でたる瑞にあるらしとなも神ながら思ほしめす。　ここをもて天地の神の顯し奉れる貴き瑞によりて、御世の年號

白し賜ふ官にや　白すままに其の官に任ずべきや否やを太上天皇に御伺ひになる。
おもぶけ　赴かしめる意。
京職の大夫　京職は左右に分れ、司法・警察・以下庶政を掌る。大夫・亮・進・屬の職員を置く。
藤原の朝臣麻呂　不比等の四男。
い　助詞。ここは主格についたもの。
圖負へる龜　背に文があつた龜。
辭別きて　特に。
うづなひ　神が納受されて。

を改め賜ひ換へ賜ふ。　ここをもて神龜六年を改めて天平元年として、天の下大く罪赦し、百の官の主典より上つかたの人等冠位一階上げ賜ふことを始め、一つ二つの慶の大命詔り賜ひ惠み賜ひ、行ひ賜ふと詔りたまふ天皇が命をもろもろ聞し食さへと宣る。

三　聖武天皇群臣に賜ひし詔

現つ御神とあめのしたしろしめす倭根子天皇が詔旨らまと宣りたまふ大命を親王たち・諸王たち・諸臣たち・百官の人等・天の下の公民もろもろ聞し食さへと宣る。

高天の原ゆり天降り坐しつつ天皇が御世を始めて中今に至るまでに、天皇が御世御世天つ日嗣と高御座に坐して治め賜ひ、惠び賜ひ來る食國天の下の業となも、神ながら思

主典　文案を勘署する役。長官・次官・判官・主典と各官にある役名。
聖武天皇云々　天平勝寶元年に天皇が東大寺に行幸せられし際の詔である。
ゆり　「より」の意。

ほしめさくと宣りたまふ大命を、もろもろ聞し食さへと宣る。

かく治め賜ひ、恵び賜ひ來る天つ日嗣の業と今皇朕が御世に當りて坐せば、天地の心を勞しみ、重しみ、辱み、恐み坐すに聞し食す食國の東の方陸奥の國の小田の郡に金出でたりと奏して進れり。　こを思ほせば、種種の法の中には佛の大御言し國家護るがたには勝れたりと聞し召して、食國天の下の諸國に最勝王經を坐せ、盧舍那佛作り奉るとして、天に坐す神・地に坐す祇を祈禱り奉り、掛けまくも畏き遠天皇を始めて御世御世の天皇が御靈たちを拜み仕へ奉り、衆人をいざなひ率ゐて仕へ奉る心は、禍息みて善くなり、危き變りて全く平らがむと思ほして仕へ奉る閒に、衆人は成らじかと疑ひ朕は黄金少なけむと思ほし憂へつつあるに、三寶

重しみ　「いか」は嚴。嚴しいので。

たには　爲には。

最勝王經　金光明最勝王經ともいふ。十卷三十一品。唐の三藏義淨の譯。國家を護ることを旨とした經。

盧舍那佛　梵語。光明遍照と譯す。我が國では大佛に對していふ。

仕へ奉る心　作り奉る心の意。

成らじかと　竣工し難いだらう。

三寶　佛法僧をいふが、ここは佛の意。

の勝れて神しき大御言の驗を蒙り、天に坐す神・地に坐す神の相うづなひ奉り、さきはへ奉り、また天皇の御靈たちの惠び賜ひ、撫で賜ふことに依りて、顯し示し給ふ物ならじと思ほし召せば、受け賜はり、歡び受け賜はり貴び、進むも知らに、退くも知らに、夜日畏恐まり思ほせば、天の下を撫で惠び賜ふこと理に坐す君の御代に當りてあるべき物を、拙くたづがなき朕が時に顯し示し給へれば、辱み、愧かしみなも思ほす。　ここをもて朕一人やは貴き大瑞を受け賜はらむ、天下共に頂き受け賜はり歡ばしむるし理なるべしと神ながらも思ほし坐してなも、もろもろを惠び賜ひ、治め賜ひ、御代の年號に字加へ賜はくと宣りたまふ天皇が大命をもろもろ聞し食さへと宣る。

辭別きて宣りたまはく、大神の宮を始めてもろもろの神

驗　金の出たことをいふ。

たづがなき　思慮のない。「たづ」は「たづき」と關係ある語。

字加へ　天平感應元年と感應の二字を加へられた。

たちに御戸代奉り、もろもろの祝部治め賜ふ。　また、寺寺に墾田の地許し奉り、僧綱を始めて、もろもろの僧尼敬ひ問ひ、治め賜ひ、新に造れる寺の官寺となすべきは官寺となし賜ふ。　大御陵守仕へ奉る人等一人二人治め賜ふ。　また、御世御世に當りて天の下奏し賜ひ、國家護り仕へ奉ることの勝れたる臣たちの侍る所には表を置きて、天地と共に人に侮らしめず、穢さしめず治め賜ふと宣りたまふ大命をもろもろ聞し食さへと宣る。

また天つ日嗣高御座の業と坐すことは、進みては挂けまくも畏き天皇が大御名を受け賜はり、退きてははは大御祖の御名を蒙りてし食國天の下をば撫で賜ひ、惠び賜ふとなも神ながらも思ほし坐す。　ここをもて王たち・大臣の子等治め賜ふいし、天皇が朝に仕へ奉り、ははに仕へ奉るにはあ

御戸代　神の稻を作る田。
祝部　ここは神主禰宜などをいふ。
墾田　開墾すべき田。
僧綱　僧の官名で、僧正・僧都・律師などをいふ。然しここは其の寺の僧尼を掌る者をいふ。
官寺　公の治めにあづかる寺。
表　標。
挂けまくも畏き　口でいふも畏多い。
大御名　天下を治め給ふ御事。
ははは大御祖　聖武天皇の御母君。藤原宮子と申す方。
いし　共に助詞。

るべし。　しかのみにあらず、挂けまくも畏き近江の大津の宮に大八洲國知ろしめしし天皇が大命として、奈良の宮に大八洲國知ろしめしし我が皇天皇と御世重ねて朕に宣りたまひしく、大臣の御世重ねて明き淨き心をもちて仕へ奉ることに依りてなも、天つ日嗣は平らけく安く聞し召し來る。　この辭忘れ給ふな、乘て給ふなと宣りたまひし大命を受け賜はり恐まり、汝たちを惠び賜ひ、治め賜はくと宣りたまふ大命をもろもろ聞し食さへと宣る。

また、三國眞人・石川朝臣・鴨朝臣・伊勢大鹿首どもは治め賜ふべき人としてなも簡び賜ひ、治め賜ふ。　また、縣犬養橘夫人の、天皇が御世重ねて明き淨き心をもちて仕へ奉り、皇朕が御世に當りても怠り緩むことなく助け仕へ奉り、しかのみにあらず、祖父大臣の殿門荒らし穢すことなく、守りつつ

近江の大津の宮に云々　天智天皇を申す。
奈良の宮に云々　元正天皇を申す。
宣りたまひし　「元正天皇の」を上に入れると意が通ずる。
三國眞人　繼體天皇の皇子椀子王の後裔。
石川朝臣　孝元天皇の皇子、彥太忍信命の後。
鴨朝臣　大國主神の後。
伊勢大鹿首　天兒屋根命の後。
縣犬養橘夫人　光明皇后の御母。
祖父大臣　藤原不比等。

あらししこと、いそしみ、うむがしみ忘れ給はずとしてなも、孫ども一人二人治め賜ふ。　また大臣として仕へ奉らへる臣たちの子等、男は仕へ奉る狀に隨ひて種種治め賜ひつれども、女は治め賜はず。

ここをもて思ほせば、男のみ父の名負ひて、女はいはれぬ物にあれや、立ち雙び仕へ奉るし理なりとなも思ほす。　父がかくしまにあれと思ひておもぶけ教へけむこと過たず、失はず、家門荒さずして、天皇が朝に仕へ奉れとしてなも汝たちを治め賜ふ。　また大伴佐伯宿禰は常もいふ如く、天皇朝守り仕へ奉ること顧みなき人等あれば、汝たちの祖どものいひ來らく、「海行かばみづく屍、山行かば草むす屍、王のへにこそ死なめ、のどには死なじ。」といひ來る人等となも聞し召す。　ここをもて遠天皇の御世を始めて、今朕が御世に當

あらししし　上の「し」は敬語の助動詞。下の「し」は過去の助動詞。
うむがしみ　よろこぶこと。
あれや　あらめやと同意。
かくしまに　かくさまに。斯樣に。
大伴佐伯宿彌　大伴・佐伯は共に天忍日命の後で、佐伯氏は大伴氏から別れたものである。宿禰は姓の一である。
みづく屍　水に漬る屍。
草むす屍　屍の上に草が生ずること。
のど　徒に。平凡に。

りても内の兵とおもほしめしてことはなも遣はす。　かれここをもて、子は祖の心なすいし子にはあるべし。　この心失はずして、明き淨き心をもちて仕へ奉れとしてなも、男女并せて一人二人治め賜ふ。　また五位より上つかたの子等治め賜ふ。　六位より下つかたに冠一階上げ給ひ、東大寺造れる人等に二階加へ賜ひ、正六位上には子一人治め賜ふ。　また五位より上つかた及び皇親の年十三より上なる、位なき大舍人等、諸の司の仕丁に至るまでに大御手つ物賜ふ。　また年高き人等治め賜ひ、困乏しき人惠び賜ひ、孝義ある人その事免し賜ひ、力田治め賜ふ。　罪人赦し賜ふ。　また王生治め賜ひ、物知り人等治め賜ふ。　また黃金を見出でたる人及び陸奥の國の國司・郡司・百姓に至るまでに治め賜ひ、天の下の百姓もろもろを撫で賜ひ、惠び賜はくと宣りたまふ天

内の兵　宮中を守る武士。
遣はす　お使ひになる。
いし　共に助詞。
子一人　子一人だけの意。
皇親　天皇の御親戚の意で、五世までの諸王をいふ。
大舍人　舍人を大舍人、內舍人とに分けたもの。刀を帶して宿衛するもの。
仕丁　諸國の民より二人宛京に上りて諸官司に使はれるもの。
力田　田のことに勤勞ある者。
王生　大學寮の學生。壬生の書誤りかともいふ。

三　聖武天皇群臣に賜ひし詔

皇が大命をもろもろ聞し食さへと宣る。

詳註宣命粹終

東京帝國大學教授
文學博士　藤村作編

詳註萬葉集粹

株式會社　帝國書院

詳註

萬葉集粹

目次

舒明天皇（長歌・短歌）　一
有間皇子（短歌）　一
天智天皇（短歌）　二
額田女王（短歌・長歌）　二
天武天皇（短歌）　三
持統天皇（短歌）　三
柿本人麻呂（長歌・短歌）　四
高市黒人（短歌）　七
長奥麻呂（短歌）　八
舍人娘子（短歌）　八
志貴皇子（短歌）　九
田口益人（短歌）　九
石上乙麻呂（短歌）　一〇
山上憶良（短歌・長歌）　一〇
笠　金村（短歌）　一三
沙彌滿誓（短歌）　一四
山部赤人（短歌・長歌）　一四
湯原王（短歌）　一八
聖武天皇（長歌）　一八
高橋蟲麻呂（長歌）　一九

目次

海犬養岡麻呂（短歌）　二〇
小野老（短歌）　二一
元興寺僧（短歌）　二一
大伴坂上郎女（短歌）　二一
大伴家持（長歌）　二三
厚見王（短歌）　二五
諸國歌（長歌・短歌）　二五
防人歌（短歌）　二六
乞食者詠二首（長歌）　二七

目次終

舒明天皇

天皇登香具山望國之時御製歌

大和には　群山あれど　取りよろふ　天の香具山
登り立ち　國見をすれば　煙立ちたつ
海原は　かまめ立ちたつ　うまし國ぞ　あきつ島
大和の國は

夕されば　小倉の山に　鳴く鹿の　今宵は鳴かず
寢ねにけらしも

有間皇子

家にあれば　笥に盛る飯を　草枕　旅にしあれば

萬葉集　二十卷。我國最古の歌集である。成立年代は明かでないが古今集によれば奈良の御帝の御時とある。勅撰説、私撰説もあつて編者も明かでない。
本書は便宜上卷別によらずに編年的作者別に記した。
舒明天皇　第三十四代の天皇。
香具山　大和國磯城郡香久山村にある。
取りよろふ　取りそなはつてゐる。
かまめ　鷗。
夕されば　夕方になると。
小倉山　大和國生駒郡にある。
有間皇子　孝德天皇の皇子。
笥　食物を盛る器。
草枕　旅の枕詞。

椎の葉に盛る

天智天皇

わたつ海の　豐旗雲に　入日さし　今夜の月夜
明らけくこそ

額田女王

熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひ
ぬ　今は漕ぎ出でな

天皇詔内大臣藤原朝臣、競憐春山萬花之艶、秋山千葉之彩時、以歌判之歌

冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴
きぬ　咲かざりし　花もさけれど　山をしげみ
入りても取らず　草深み　とりても見ず　秋山の
木の葉を見ては　黃葉をば　取りてぞしぬぶ　青
きをば　置きてぞ歎く　そこしたぬし　秋山吾れは

天武天皇

幸于吉野宮時御製歌

淑人の　良しとよく見て　よしと言ひし　芳野よ
く見よ　よき人よく見つ

持統天皇

春過ぎて　夏來るらし　白妙の　衣乾したり　天
の香具山

天智天皇　第三十八代の天皇。
わたつ海　海のこと。
豐旗雲　旗のやうになびいてゐる雲。「豐」は美稱。
こそ　こゝは希望をあらはす。

額田女王　鏡女王（鎌足の妻）の妹。天智天皇の妃。
熟田津　伊豫三津濱の古名。
漕ぎ出でな　「な」は希望をあらはす。

天皇　天智天皇を申す。
藤原朝臣　鎌足。

冬ごもり　春の枕詞。

山をしげみ　山に草木が茂つてゐるので。

置きてぞ歎く　枝に置いたまま賞美する。
そこし　「し」は助詞。
秋山吾れは　吾れは秋山の側置。
天武天皇　第四十代の天皇。
吉野宮　紀伊國吉野郡中莊村大字宮瀧にあつた。
淑人　貴人の意。この歌は頭韻を用ゐてゐる。

持統天皇　第四十一代の天皇。
白妙　白栲の意。衣の枕詞となつてゐる。

柿本人麻呂

過近江荒都時作歌

玉だすき　畝火の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ
あれましし　神のことごと　樛の木の　いや繼ぎ
嗣ぎに　天の下　知ろし食しを　天に滿つ　大
和を置きて　青丹よし　奈良山を越え　いかさま
に　思ほし食せか　天離る　夷には有れど　石走
の　近江の國の　樂浪の　大津の宮に　天の下
知ろし食しけむ　天皇の　神のみことの　大宮は
此處と聞けども　大殿は　此處と云へども　若草
の　茂く生ひたる　霞立つ　春日の霧れる　百敷
の　大宮處　見れば悲しも

柿本人麻呂　傳未詳。
近江荒都　大津宮のこと。滋賀郡滋賀村にある。天智・弘文兩朝の帝都。
玉だすき　畝傍の枕詞。
畝火の山　畝傍山。大和國高市郡白橿村にある。
橿原のひじり　神武天皇を申す。
ゆ　「より」の意。
あれましし　御生れになつた。
ことごと　盡くの意。皆。
樛の木　つぎつぎの枕詞。
天に滿つ　大和の枕詞。
青丹よし　奈良の枕詞。
奈良山　春日山から西北一帶の山。
天離る　夷の枕詞。
石走の　近江の枕詞。
樂浪の　大津の枕詞。元は地名である。
神のみこと　みことは尊稱。天皇を尊んで申す。
百敷　大宮の枕詞。

反歌

樂浪の　滋賀の辛崎　幸くあれど　大宮人の　船
待ちかねつ

さざなみの　滋賀のおほわだ　淀むとも　昔の人
に　また逢はめやも

淡海の海　夕浪千鳥　汝が鳴けば　情もしぬに
古へ思ほゆ

從近江國上來時、至宇治河邊作歌

もののふの　八十うぢ河の　網代木に　いさよふ

反歌　長歌の内容を總括的に言つたもの。
辛崎　近江八景の一。唐崎。
幸く　恙ない。
待ちかねつ　待つことが出來ない。かれは不得の意。
おほわだ　唐崎附近。水の入り込んだ所。
情もしぬに　心もしほれる位に。
思ほゆ　思はれる。
宇治河　山城國宇治郡を流れる。
もののふの八十　宇治の序。
網代木　魚を捕る網代の杭。
いさよふ　ためらつてゐる。

浪の　行くへ知らずも

輕皇子宿于安騎野時、作歌

東の　野に炎の　立つ見えて　かへり見すれば
月かたぶきぬ

下筑紫國時、海路作歌

大君の　遠の朝廷と　あり通ふ　島門を見れば
神代し思ほゆ

天皇御遊雷岳之時、作歌

大君は　神にしませば　天雲の　雷の上に　庵り
せるかも

も　感動の助詞。

輕皇子　天武天皇の皇子草壁皇子の第二王。後の文武天皇。
安騎野　大和國宇陀郡の西部の古名。
炎　つてぼつ光とゐること。陽炎のことにもいふ。

遠の朝廷　遠方にある朝廷の役所。こゝは太宰府をいふ。
あり通ふ　「あり」は繼續の意の接頭語。
島門　島々の間の船の通ひ路。

天皇　持統天皇を申す。
雷岳　大和國高市郡飛鳥村大字雷にある。神岳。三諸の神名備山ともいふ。
天雲　雷の枕詞。

敷島の　大和の國は　言靈の　助くる國ぞ　眞幸
くありこそ

高市黑人

高市古人、感傷近江舊墟作歌

古の　人にわれあれや　樂浪の　故き京を　見れ
ば悲しき

羇旅歌

旅にして　物戀しきに　山下の　赤のそほ船　沖
に漕ぐ見ゆ

敷島　大和の枕詞。
言靈　言葉の神靈。
眞幸　幸福。

高市黑人　傳未詳。
高市古人　黑人の誤であらう。

山下の　赤の枕詞。
赤のそほ船　官船をいふ。

櫻田へ　田鶴鳴き渡る　年魚市潟　潮干にけらし
田鶴鳴きわたる

長奥麻呂

二年壬寅、太上天皇幸于參河國時歌

引馬野に　にほふ榛原　入り亂り　衣にほはせ
旅のしるしに

苦しくも　降り來る雨か　三輪が崎　佐野のわた
りに　家もあらなくに

舍人娘子

從駕作歌

櫻田　尾張國愛知郡作良邊の田。
年魚市潟　尾張國熱田新田。

長奥麻呂　傳未詳。
二年　大寶二年。
太上天皇　持統天皇。
引馬野　遠江國濱名郡にあつた。今の濱松市の西北一帶の野。
榛原　萩の原。

三輪が崎　紀伊國東牟婁郡新宮の南。佐野はその村落。
わたり　渡場。附近。

舍人娘子　傳未詳。

ますらをの　さつ矢たばさみ　立ち向ひ　射る的
形は　見るにさやけし

志貴皇子

慶雲三年丙午、幸于難波宮時御作歌

葦邊行く　鴨の羽がひに　霜ふりて　寒き夕は
大和し思ほゆ

權御歌

石走る　垂水の上の　早蕨の　萠え出る春に　成
りにけるかも

田口益人

萬葉集粹

さつ矢　幸矢。獵をする矢。
射る　初句から射るまでが的の序。
的形　伊勢國多氣郡の濱邊の古名。的形浦。

志貴皇子　天智天皇の皇子。光仁天皇の御父。
慶雲　文武天皇の年號。
難波宮　攝津國西成郡豐崎宮のこと。
羽がひ　兩翼。

權　春を迎へた喜悅。
石走る　垂水の枕詞。
垂水　地名の說もあるが、瀧のこと。
上　ほとり。

田口益人　文武天皇の頃から元正天皇の頃までの人、和銅元年三月上野守となつた。

任上野國司時、至駿河清見崎作歌

盧原の　清見が崎の　三保の浦の　ゆたけき見つ
つ　物思ひもなし

石上乙麻呂

大船に　眞梶しじ貫き　大君の　みことと畏こみ
磯廻するかも

山上憶良

在大唐時、憶本郷作歌

いざ子等　早く日本へ　大伴の　御津の濱松　待
ち戀ひぬらむ

盧原の云々　駿河國庵原郡清見崎の三保の浦。今の清水港。ゆたけき　ゆるやかな浪をいふ。

石上乙麻呂　石上麻呂の第三子。中務卿中納言となる。勝寶年間の人。

眞梶　眞は接頭語。

しじ貫　繁く貫く意。船の左右に澤山つける。

磯廻　岸に沿うて漕いで行く。

山上憶良　齊明天皇の六年に生れ、天平五年六月七十四歳にて歿す。大寶元年入唐、晩年は筑前守となる。

大伴　御津の濱邊一帶の地名。

御津　攝津の難波津。今の大阪の長堀道頓堀邊らしい。

思子等歌一首并序、反歌

釋迦如來金口正說。等思衆生、如羅睺羅。又說、愛無過子。至極大聖尚有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子乎。

瓜はめば　子供思ほゆ　栗食めば　まして忍ぬば
ゆ　いづくより　來りしものぞ　まなかひに　も
となかかりて　安寢しなさぬ

反歌

銀も　金も玉も　何せむに　まされる寶　子に如
かめやも

富人の　家の子等の　着る身なみ　くたし捨つら

金口　釋迦の口の意。

羅睺羅　釋迦の子。

蒼生　天下の萬民。

瓜はめば　瓜をたべると。

まなかひ　目の前に。

もとなかかりて　氣になつて。

安寢　安眠。

何せむに　何にならうか。

着る身なみ　着物が澤山で着盡くすことが出來ないで。

くたし　朽し。腐らす。

む　きぬ綿らはも

好去好來歌

神代より　言傳てけらく　虛見つ　大和の國は
皇神の　いつくしき國　言靈の　さきはふ國と
語り繼ぎ　いひつがひけり　今の世の　人もことと
ごと　目の前に　見たり知りたり　人さはに　滿
ちてはあれども　高光る　日の御朝廷　神ながら
愛での盛りに　天の下　奏したまひし　家の子と
撰びたまひて　勅旨　載き持ちて　唐の　遠き境
に遣はされ　罷りいませ　海原の　邊にも沖にも
神づまり　うしはきいます　諸の　大御神等　船
の舳に　道引きまをし　天地の　大御神等　大和

好去好來　天平五年、遣唐使多治比眞人廣成を餞した歌。無事で行って來なさいの意。
言傳てけらく　言傳へて居ることは。
いつくしき　愛くしむ、嚴しき兩樣にいはれる。
いひつがひけり　言傳へて來た。
さは　多くの意。
高光る　日の枕詞。
日の御朝廷　天皇を申す。
神ながら　神御自身の意思から。
愛での盛りに　賞し給ふあまりに。
天の下云々　ここは左大臣丹治比眞人島をいふ。島の子孫として廣成が選ばれたのである。
うしはき　支配する。

の　大國靈　久方の　天の御空ゆ　あまがけり
見渡したまひ　事をはり　かへらむ日には　又更
に　大御神等　船の舳に　御手打ち掛けて　墨繩
を　はへたる如く　あてかをし　ちかの岬より
大伴の　御津の濱びに　ただはてに　み船は泊て
む　つつみなく　さきくいまして　はや歸りませ

反歌

大伴の　御津の松原　かき掃きて　われ立ち待た
む　はや歸りませ

笠金村

鹽津山作歌

大國靈　特に大和の國土を鎭護する神。
久方　天の枕詞。
墨繩　眞直ぐに引くために用ゐる墨をつけた繩。今日も大工などが使用してゐる。
はへたる　延した。
あてかをし　ちかの枕詞。
ちかの岬「ちか」は平戸五島をいふ。
ただはて　眞直ぐに船が泊る。
つつみなく　無事で。
かき掃きて　掃き清めて。
立ち待たむ　立つて待ちませう。
笠金村　傳未詳。
鹽津山　近江國伊香郡鹽津鄕にある山。

丈夫の　弓末振り立て　射つる矢を　後見む人は
語り繼ぐがね

和歌

もののふの　臣の壯士は　大君の　任けのまにま
に　聞くとふものぞ

沙彌滿誓

世の中を　何に譬へむ　あさびらき　漕ぎにし船
の　跡無きが如

山部赤人

武庫の浦を　漕ぎたむ小舟　粟島を　背に見つつ
乏しき小舟

登神岳作歌

三諸の　神名備山に　五百枝さし　繁に生ひたる
つがの木の　いや繼ぎ嗣ぎに　玉葛　絶ゆる事な
く　ありつつも　止まず通はむ　飛鳥の　古き都
は　山高み　河とほしろし　春の日は　山し見が
ほし　秋の夜は　河し清けし　朝雲に　田鶴は亂
れ　夕霧に　かはづは騷ぐ　見る毎に　音のみし
泣かゆ　古へ思へば

望不盡山歌

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河

和歌　前出の石上乙麻呂の歌に和した歌。
任けのまにまに　御任命のままに。
聞くとふ　聞くといふの約。お仕へ申すべきもの。
沙彌滿誓　俗名を笠麻呂といつた。右大辨にまでなつたが養老五年に出家した。
あさびらき　朝船が港を出て行くこと。
山部赤人　傳未詳。
武庫の浦　攝津國武庫郡武庫村より和田岬まで。
漕ぎたむ　漕ぎ廻はる。
粟島　未詳。
乏しき　羨しい意。
神岳　雷岳（前出）ともいふ。
五百枝さし　澤山の枝の茂つてゐる。
玉葛　絶ゆる事なくの枕詞。
ありつつも　生き永らへて。
飛鳥の古き都　飛鳥の淨見原の舊都をいふ。
河とほしろし　飛鳥川が遠くまではつきりと見える。
見がほし　見たい。
かはづ　河鹿。
不盡山　富士山のこと。
天地の云々　天地開闢の時から。
神さびて　神々しくて。

なる　ふじの高嶺を　天の原　振さけ見れば　渡る日の　陰も隠ろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　いゆきはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語りつぎ　言ひ継ぎ行かむ　不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆ　打出て見れば　眞白にぞ　不盡の高嶺に　雪は降りける

和歌の浦に　潮滿ち來れば　潟をなみ　葦邊を指して　田鶴鳴き渡る

神龜二年乙丑夏五月、幸于芳野離宮時、

陰も隠ろひ　日の光もかくれて。
いゆきはばかり　行きかねて。「い」は接頭語。
時じく　何時といふ定まりもなく。いつも〳〵。

田兒の浦　駿河國富士郡にある。富士山の南方。
ゆ　ここは「に」の意。

和歌の浦　紀伊國海草郡にある。
潟をなみ　干潟がなくなるので。

神龜　聖武天皇の御年號。

作歌（反歌）

三吉野の　象山の際の　木末には　ここだもさわぐ　鳥の聲かも

烏羽玉の　夜の更け行けば　久木生ふる　清き河原に　千鳥しば鳴く

春の野に　菫摘みにと　來し吾ぞ　野をなつかしみ　一夜ねにける

明日よりは　若菜摘まむと　標し野に　昨日も今日も　雪は降りつつ

象山　大和國吉野郡中莊村大字喜佐谷の群山の一峯。
際　山の間。
木末　梢。
ここだ　甚だしく。澤山。

烏羽玉　夜の枕詞。
久木　楸。アカメガシハともいふ。落葉喬木。雜草と交つて自生し、幹の高さ五六尺にも及ぶ。
しば鳴く　しきりに鳴く。

標し　占めて居た。ここは心に決めてゐた意。

湯原王

芳野作歌

吉野なる　夏實の川の　川よどに　鴨ぞ鳴くなる
山影にして

聖武天皇

天皇賜酒節度使卿等御歌

食す國の　遠の朝廷に　汝等し　かく退去りなば
平らけく　吾は遊ばむ　手抱きて　我は御在さむ
天皇朕　うづの御手もち　搔き撫でぞ　ねぎ賜ふ
打ち撫でぞ　ねぎ賜ふ　還り來む日　相飲まむ酒
ぞ　此の豐御酒は

湯原王　志貴皇子の御子。光仁天皇の御弟。

夏實の川　吉野川の上流をいふ。

聖武天皇　第四十五代の天皇。節度使　諸道にあつて兵士官船を檢閲し、征討の事なども掌る。天平四年八月に藤原房前を東海・東山二道の節度使に、多治比縣守を山陰道に、藤原宇合を西海道の節度使に任ぜられた。

食す國　天皇のお治めになる國。

遠の朝廷　鎮守府や太宰府などをいふ。

うづの御手　尊い手。うづは珍貴な意。

ねぎ　ねぎらふ。

豐御酒　豐は美稱。

反歌

丈夫の　行くとふ道ぞ　おほろかに　思ひて行く
な　丈夫の伴

高橋蟲麻呂

四年壬申、藤原宇合卿、遣西海道節度使之時、作歌一首幷短歌

白雲の　龍田の山の　露霜に　色づく時に　打越
えて　旅行く君は　五百重山　いゆきさくみ　賊
守る　筑紫に至り　山のそき　野のそき見よと
伴の部を　わかち遣はし　山彦の　應へむ極み
谷ぐくの　さ渡る極み　國方を　めし賜ひて　冬
ごもり　春さり行かば　飛ぶ鳥の　早く來ましね

行くとふ道　行くといふ道の約。丈夫に限つて與へられた道であるよ。

おほろかに　並並に。

丈夫の伴　丈夫の仲間よ。

高橋蟲麻呂　傳未詳。

西海道　筑前・筑後・豐前・豐後・肥後・肥前・日向・大隅・薩摩及び壹岐・對馬・琉球より成る。

白雲　龍田の枕詞。

龍田の山　大和國生駒郡にある山。

露霜　薄霜。

いゆきさくみ　「い」は接頭語。行き踏み分ける。

賊守る　外敵を守る。

そき　はて。

伴の部　部下。

山彦　こだま。

谷ぐく　蟇。

さ渡る　「さ」は接頭語。

めし　見るの敬語。

飛ぶ鳥　早の枕詞。

龍田道の　岡邊の路に　につつじの　薫はむ時の
櫻花　咲きなむ時に　山たづの　迎へまゐ出む
君が來まさば

反歌

千萬の　軍なりとも　言あげせず　取りて來ぬべ
き　男とぞ思ふ

海犬養岡麻呂

六年甲戌、應詔歌

御民われ　生けるしるしあり　天地の　榮ゆる時
に　あへらく思へば

小野老

青丹よし　寧樂の都は　咲く花の　薫ふが如く
今盛りなり

元興寺僧

十年戊寅、自嘆歌

白珠は　人に知らえず　知らずともよし　知らず
とも　吾れし知れらば　知らずともよし

大伴坂上郎女

月ノ歌

烏羽玉の　夜霧の立ちて　おほほしく　照れる月
夜の　見れば悲しさ

につつじ　丹躑躅。
山たづ　迎の枕詞。

言あげせず　言葉にかけてとやかくといはないで。
取りて　敵を殺して。

海犬養岡麻呂　傳未詳。
六年　天平六年。
御民われ　御民であるわれの意。
あへらく　逢へる事を。

小野老　天平九年六月、太宰大貳にて歿す。

元興寺　法興寺の別名。奈良の猿澤の池の畔にある。
十年　天平十年。
白珠　自分をたとへて言つたもの。
知らえず　知られない。

大伴坂上郎女　安麻呂の女。旅人の妹、家持の叔母。
おほほしく　おぼろに。はつきりとしない。

大伴家持

賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌

葦原の　瑞穂の國を　天降り　しらしめしける
すめろぎの　神のみことの　御代かさね　天の日
嗣と　しらしくる　君の御代御代　しきませる
四方の國には　山河を　廣みあつみと　たてまつ
る　御調寶は　數へえず　盡しもかねつ　しかれ
ども　わが大君の　諸人を　いざなひ給ひ　善き
事を　始め給ひて　黄金かも　樂しけくあらむと
思ほして　した惱ますに　雞が鳴く　東の國の
陸奥の　小田なる山に　黄金ありと　奏し給へれ
御心を　あきらめ給ひ　天地の　神あひうづなひ

大伴家持　旅人の子。越中守、中納言、持節征東將軍を歴任し、延暦四年五十七で薨じた。

陸奥云々　天平二十一年二月、陸奥國小田郡より黄金献上。聖武天皇御嘉賞ありて東大寺に行幸せられ群臣に詔を賜うた。家持從五位上に進められた。この事は本卷の宣命粹を參照されたい。

すめろぎの神のみこと　ここは瓊々杵尊をいふ。

しきませる　御治めになる。

あつみ　山の奥深いこと。

御調寶　諸國からの貢物。

善き事を　東大寺の大佛鑄造をさす。

した惱ますに　下心を御惱ましになる。

雞が鳴く　東の枕詞。

小田　今の陸前國遠田郡にある。

奏し給へれ　奏し給へればの意。

あきらめ　御晴らしになり。

うづなひ　御受納になる。

すめろぎの　御靈たすけて　遠き代に　なかりし
事を　わが御代に　顯はしてあれば　御食國は
榮えむものと　神ながら　思ほしめして　ものの
ふの　八十伴の雄を　まつろへの　むけのまにま
に　老い人も　女の童兒も　しが願ふ　心だらひ
に　撫で給ひ　治め給へば　ここをしも　あやに
貴み　うれしけく　いよよ思ひて　大伴の　遠つ
神祖の　その名をば　大來目主と　負ひ持ちて
仕へし官　海行かば　みづく屍　山行かば　草む
す屍　大君の　邊にこそ死なめ　かへりみは　せ
じとことだて　ますらをの　清きその名を　古よ
今のをつつに　流さへる　おやの子どもぞ　大伴
と　佐伯の氏は　人のおやの　立つることだて

榮えむもの　「大佛の加護によつて」を上に入れて見ればよい。

八十伴の雄　八十伴の緒とも書く。多くの朝臣をいふ。

まつろへ　歸順。

むけのまにまに　仕向のままに。

しが　其がの意。

心だらひ　滿足する。

治め給へば　仁政を御施しになる。

うれしけく　大伴・佐伯氏等の位階を進められたのをいふ。

大伴の遠つ神祖　天忍日命。

大來目主　大來目部を引率したから。

ことだて　常人と異つて。

古よ　「よ」はよりの意。

をつつ　現に。現在に。

おやの子ども　先祖の子孫。

人のおや　「人」は輕く添へた。「人の子」もそれと同じである。

人の子は　おやの名絶たず　大君に　まつろふも
のと　いひつげる　ことのつかさぞ　梓弓　手に
とりもちて　劍太刀　腰にとり佩き　朝まもり
夕のまもりに　大君の　御門のまもり　吾をおき
て　又人はあらじと　いやたてて　おもひしまさる
大君の　御言のさきの　聞けば貴み

反歌三首

ますらをの　心おもほゆ　大君の　御言のさきを
聞けば貴み

大伴の　遠つ神祖の　おくつきは　しるく標立て
人の知るべく

ことのつかさ　特殊の職の意。

いやたて　益ゝ我家の主義を立てる。

おもひしまさる　いよ〳〵心が勇む。

御言のさき　大伴・佐伯氏等に位をすすめられたをさす。有難い詔。

おくつき　墳墓。

しるく　著しく。

標立て　墓所を高く築く意。

すめろぎの　御代榮えむと　東なる　陸奥山に
くがね花咲く

厚見王

かはづ鳴く　甘南備河に　陰見えて　今や咲くら
む　山吹の花

諸國歌

能登國歌

加島嶺の　机の島の　しただみを　い拾ひ持ち來
て　石持ち　つつきはふり　早川に　洗ひそそぎ
辛鹽に　ここと揉み　高杯に盛り　机に立てて

厚見王　舍人親王の御子。兵部卿。天平神護三年薨去。御年四十。

甘南備河　大和國生駒郡龍田川のことか。或は飛鳥川か。

諸國歌　諸國の民謠。

加島嶺　鹿島郡香島津の山。

机の島　七尾灣中にある。

しただみ　きしやご貝。

つつきはふり　突きやぶり。

ここと　揉み洗ふ音の形容。

高杯　脚の付いた食器。

机　食卓。

母にまつりつや　めづこのとじ　父にまつりつや
みめづこのとじ

越中國歌二首

澁谷の　二上山に　鷲ぞ子産とふ　指羽にも　君
がみために　鷲ぞ子むとふ

彌彦の　おのれ神さび　青雲の　たなびく日すら
小雨そぼ降る

防人歌

父母え　いはひて待たね　筑紫なる　みづく白玉
とりて來までに

まつりつや　奉ったか。
めづこのとじ　愛しい娘よ。

澁谷　越中國氷見郡太田村の海岸。
二上山　射水郡にある。高岡市の北。
指羽　鳥の羽或は絹にて大團扇のやうに作り、卽位朝儀に天皇高御座に出御の時、龍顏にかざし奉る具。
彌彦　越後國蒲原郡伊夜比古神社。大寶四年に越中四郡が越後に屬した。

防人　四海道の要所を守る軍人。天平より東國の壯丁をあてた。
父母え　父母よ。

まけ柱　ほめて造れる　殿の如　いませ母刀自
おめかはりせず

父母が　かしらかきなで　さくあれて　いひし言
葉ぞ　忘れかねつる

今日よりは　かへりみなくて　大君の　しこの御
楯と　出で立つわれは

唐衣　裾にとりつき　泣く子らを　おきてぞ來ぬ
や　おもなしにして

乞食者詠二首

まけ柱　眞木柱。ほめて造れる　室壽を言つて造つた。
刀自　老母にいふ。處女にもいふ。
おめかはり　面變り。
さくあれて　幸くあれと。

しこの御楯　强い楯として敵を守る。

唐衣　裾の枕詞。

おもなし　母無しの意。母が既に亡くなつてゐる。

乞食者詠　乞食が門に立つて歌つたもの。

いとこなせの君　居り居りて　物にい行くと　韓國の　虎とふ神を　生捕りに　八頭とり持ち來
其の皮を　疊に刺し　八重疊　平群の山に　四月と五月のほどに　藥獵　仕ふる時に　足引の　此の片山に　二つ立ち　いちひが本に　梓弓　八つたばさみ　ひめかぶら　八つたばさみ　しし待つと　わが居る時に　さ牡鹿の　來立ち嘆かく　たちまちに　吾は死ぬべし　大君に　吾は仕へむ
吾が角は　御笠のはやし　吾が耳は　御墨の坩
吾が目らは　眞澄の鏡　吾が爪は　御弓の弓弭
吾が毛らは　御筆のはやし　吾が皮は　御箱の皮
に　吾が肉は　御膾はやし　吾が肝も　御膾はやし　吾がみぎは　御鹽のはやし　老いはてぬ　吾

いとこなせの君　親愛なる夫の意。
居り居りて　永く住んでゐて。
虎とふ神　虎といふ神。虎や狼などを神と見た。
疊に刺し　ここまでの十句は序。
八重疊　平群の「へ」の枕詞。
藥獵　鹿の若角を藥用にするための鹿狩。
いちひ　櫟。
八つたばさみ　狩人が澤山弓を手に持つて。
ひめかぶら　小さな鏑矢。
しし　鹿をいふ。「しし」は廣く猪や鹿にいふ。
嘆かく　嘆いていふには。
はやし　かざりの意。
御墨の坩　墨汁を入れる壺。
目ら「ら」は助詞。
眞澄の鏡「眞」は接頭語。
みぎ　胃袋をいつたものらしい。
御鹽　鹽辛。ししびしほの略。

が身一つに　七重花咲く　八重花咲くと　申しはやさね　申しはやさね

忍照るや　難波の小江に　庵作り　なまりて居る
葦蟹を　大君召すと　何せむに　吾を召すらめや
明らけく　吾は知る事を　歌人と　吾を召すらめ
や　笛吹きと　わを召すらめや　琴彈きと　わを
召すらめや　かもかくも　御言受けむと　今日今
日と　飛鳥に到り　立ちたれど　置勿に到り　つ
かねども　つくぬに到り　東の　中の御門ゆ　ま
ゐり來て　御言受くれば　馬にこそ　ふもだしか
くもの　牛にこそ　鼻繩はぐれ　足引の　此の片
山の　もむにれを　五百枝はぎたり　天てるや

七重花咲く云々　天皇の御役に立つたことを喜ぶ意。
忍照るや　難波の枕詞。
小江　「小」は接頭語。
なまりて　隱れて。
葦蟹　葦の邊にゐる蟹。
明らけく　自分の無能を明に知つてゐる。
今日今日と「明日」「飛鳥」の序。
置勿　飛鳥の内にある地名であらう。
つかねども　つくの序。
つくぬ　地名であらうが未詳。
ふもだし　絆。綱。
はぐれ　つける。
もむにれ　百榆。
五百枝はぎたり　皮を多く剝ぎ垂れること。

日のけに干し　さひづるや　からうすに舂き　庭に立つ　すりうすに舂き　忍照るや　難波の小江の　はつたれを　辛く垂りきて　陶人の　作れる瓶を　今日行きて　明日取り持ち來　吾が目らを鹽ぬり給ひ　もちはやすも　もちはやすも

天てるや　日の枕詞。
日のけ　日の氣。天日。
さひづる　「から」にかかる枕詞。
庭に立つ　すりうすの枕詞。
はつたれ　初垂。辛い鹽。
陶人　陶器を作る人。
もちはやすも　旨いといつて賞美される。

詳註 萬葉集粹 終

詳註 上古文粹

昭和八年二月一日印刷
昭和八年三月二十八日發行

定價金參拾五錢

編者　藤村作
東京市神田區仲猿樂町三〇
發行者　株式會社帝國書院　代表者　增田啓策
東京市京橋區銀座四二ノ三
印刷者　高橋郁
東京市神田區仲猿樂町三〇
發行所　株式會社帝國書院　振替口座東京六七〇二番
大阪市東區横堀四ノ三
關西販賣所　三宅莊藏書店　振替口座大阪六六九

不
複
製

終